

「1941年4月戦争」とユーゴスラヴィア王国崩壊の考察

材木 和雄

広島大学大学院総合科学研究科

On Causes of Defeat and Collapse of Kingdom of Yugoslavia in April War 1941

Kazuo ZAIKI

Studies of Civilization and Society,
Graduate School of Integrated Art and Sciences

Abstract

Yugoslavia was attacked by Nazi-Germany on April 6, 1941. The king and the government left the country by air on April 15 for exile. The Royal Yugoslav Army capitulated to the Axis Forces on April 17, just eleven days later from the outbreak of war. The Germans immediately dismembered the conquered country. The Kingdom of Yugoslavia was not only militarily defeated in war but also deprived of the right to exist as a state.

Before the Second World War the Yugoslav Army had a great prestige in Europe based on its contribution to the victory of the Allied Forces in the First World War. Though encircled Yugoslavia's ultimate defeat was admittedly inevitable, it was nevertheless a great surprise that its Army presented only feeble performance and defeated within so short a time. Therefore immediately after the occupation of Yugoslavia the concerned parties began inquiring the reason and responsibility for such a disgraceful collapse of the Army and the Kingdom.

During the World War Serbian nationalist claimed that the treacherous behavior of Croats and other non-Serbian people of Yugoslavia was the main reason for a quick breakup of the Kingdom in April war of 1941. Though Communist party of Yugoslavia sharply objected to such claims, the decline and end of Communist control made it possible for these ideas to gain foothold in modern Serbian history. Naturally these theories were met by backlash of Croatian historians.

Considering such controversy, this article pointed out three reasons. The first factor was Yugoslav military unpreparedness. Surely the Yugoslav high command must have expected German armed intervention as an aftermath of the anti-Tripartite Pact coup on March 27 1941. However, when the German forces struck, the mobilization and concentration of Yugoslav defense forces had hardly begun. In the end, Yugoslavia was less than half mobilized.

The second factor was deficiency of defense plans. Before the war the Yugoslav General Staff worked out three defense plans one. However, all of these plans committed to a cordon-

type defense. Instead of massing their forces around strategic points, the Yugoslav command chose to scatter its forces and spread them along the entire perimeter of the country's frontier. It was easy for the German highly mechanized attack forces to break through the poor Yugoslav defense lines.

The third factor was the lack of fighting spirits among major elements of the Yugoslav Army. Shortly after the Germans attacked, entire Croat units simply threw away and quit fighting. There can be little doubt years of antagonism between the Serbs and Croats had a great influence over their morale. However, the persistence was missing among Serb elements of the Army. Good evidence is as follows. The German troops which started from Bulgaria and charged forward through mid-Serbia reached to Beograd almost the same time that other troops which advanced through the plain of Slavonia, although mountainous terrain in south-east Yugoslavia gave the defender a certain advantage over highly mechanized attack force.

The author thinks that the Kingdom still had a prospect to continue to resist even after its formal capitulation. However, the royal government deserted the country so hasty that it lost the public confidence and ultimately precluded the possibility to rebuild the nation after the War.

1 はじめに

1941年4月6日、ドイツ軍の航空部隊は突如ユーゴスラヴィアに侵入し、首都ベオグラードと周辺の軍事施設に猛爆を加えた。実はこの二週間前にドイツは長い交渉の末にユーゴスラヴィアを三国同盟に加入させたばかりであった。しかし、ユーゴスラヴィアでは政府代表が議定書に署名した直後にクーデターが起こり、三国同盟に反対する勢力が政権を掌握した。ドイツの攻撃はこの出来事に対する報復措置であった。空爆の後に多方面から国境を越えたドイツ軍は得意の電撃戦でこの国の守備隊を次々と打ち破った。ユーゴスラヴィア王国軍は総崩れになり、開戦からわずか11日後の4月17日に無条件降伏に追い込まれた。これに先立ってユーゴスラヴィア王国政府と国王は国外に脱出した。その後、残された国家はドイツとその同盟国によって徹底的に解体された。ユーゴスラヴィアは軍事的に敗北しただけでなく、国家として存続することを許されず、地図上から消し去られた。

ユーゴスラヴィア王国軍は当時、バルカン半島では屈指の軍隊だと見なされていた。これはその前身であるセルビア王国軍が第一次世界大戦中に

多大な犠牲を出しながらも勇猛果敢に戦い、連合国側の勝利に大きく貢献したことによる。そのため、ユーゴスラヴィア軍が有効な抵抗を示すことなく短期間で壊滅したことは外部の観察者にとって信じがたい出来事であり、この国の政府と軍指導部にとっては大きな恥辱となった。もともとドイツとの軍事力の差は歴然としており、周囲を敵国に囲まれたユーゴスラヴィアの敗北は不可避的であった。しかし、問題はその負け方であり、この国の戦いぶりが余りにもお粗末であったことである。それゆえ、このような不名誉な敗北を招いた原因と責任はどこにあるのかが直ちに関係者の間で議論されることになった。

当然のことながら、戦闘を指揮したユーゴスラヴィア軍の総司令部に責任を求める意見があった。しかし、開戦時に首相と参謀総長を兼任していたシモヴィッチ将軍は軍司令部の責任を断固否定し、むしろクロアチアの部隊の裏切りがユーゴスラヴィア軍の急速な崩壊の原因だという見解を示した。この見解は、当初からクロアチア人の将兵は士気が低く、ドイツ軍に対する戦闘意欲を欠いていたこと、とくに4月10日にドイツ軍と内通したクロアチア人分離主義団体の幹部が「独立クロアチア国」の樹立を宣言し、これに呼応する形でクロア

チア人部隊の戦線離脱が加速したとされる事態を念頭に置いていた。セルビア人閣僚の多くも同様の見方をしたが、このような見解には亡命政府内のクロアチア人グループが激しく反発した。彼らは、このたびの戦争では一連の判断ミス、防衛システムの欠陥、不運な出来事が重なり、このような結果に至ったと主張した¹⁾。

第二次世界大戦後の社会主義体制の下では、1941年4月のユーゴスラヴィア王国軍崩壊の原因をクロアチア人の裏切りに求めるような見解は影を潜めた。共産党は諸民族の同胞愛と団結をイデオロギーとしてユーゴスラヴィア国家を再建しようとしたため、いかなる民族にせよ、一つの民族に敗戦の責任を負わせるような議論の仕方は祖国を裏切る行為として厳しく戒めたからである。また共産党にとって彼らを非合法化し弾圧してきたユーゴスラヴィア王国の崩壊は少しも問題ではなく、その後の党勢拡大のきっかけを与えた点で歓迎すべき事態であった。共産党は戦前からユーゴスラヴィア王国を「諸民族の監獄」だと公言しており、その崩壊は不公正な社会的・政治的諸制度とブルジョアジーの国家管理能力の欠如の必然的な結末であると見なしていた。

しかし、チトー死後の1980年代にナショナリズムが復活し始めると、セルビアの歴史家の間ではユーゴスラヴィア王国軍の名誉を回復しようとする動きが起こった。彼らは王国軍の敗北を早めた要因のうち、「独立クロアチア国」の樹立宣言の影響を重視した。なぜなら、このあとこの国の西部戦線は無防備になり、ドイツ軍に追い詰められたユーゴスラヴィア軍総司令部は降伏の決断を余儀なくされたと考えたからである。もっとも、独立クロアチア国の政権を担当したウスタシは1941年4月の時点ではイタリアから戻ったばかりであり、クロアチア人民衆の間に大きな支持基盤をもっていなかった。そこでセルビアの歴史家は、当時のクロアチア人に強い影響力をもっていたクロアチア農民党指導部とカトリック教会がすでに戦前からウスタシおよび枢軸国と関係をもち、彼らがユーゴスラヴィアの破壊の準備をしてきたことを示そうとした。代表的な研究はヴェリミール・テルジッチの『1941年のユーゴスラヴィア王国の崩壊』

(1982年)²⁾である。テルジッチはユーゴスラヴィア王国軍の将校で王国軍の崩壊後に共産党が主導する人民解放運動に参加した経歴をもつ人物であった。

このような動向は当然、クロアチアの研究者の反発を招いた。その急先鋒は、1930年代のクロアチア農民党の研究では第一人者と認められていたリュボ・ボバンであった。テルジッチはクロアチア農民党党首のマチェックを枢軸国の内通者のように描いたが、ボバンはその論拠を逐一検討し、テルジッチの主張がいかに出所の分からない文書や信憑性が疑われる情報に依拠しているかを明らかにした。1930年代のクロアチア農民党はこの国の最大の反対勢力であり、ユーゴスラヴィア王国の官憲はクロアチア農民党に対する抑圧を正当化するため、党幹部の言動に脚色を加えて同党を反国家的で反ユーゴスラヴィア的な団体として描き出そうと腐心していた。ボバンが遺憾としたのは、テルジッチをはじめセルビアの歴史家の一部がこのような脈絡で出現した資料をクロアチア農民党の路線を示す確かな証拠として無批判に利用していることであった。ボバンによれば、クロアチア農民党は政治的闘争の手段として暴力を採用しようとしたことは一度もなく、多くのメンバーはウスタシの路線を冒険主義的であると見なし、彼らの側からウスタシの運動に連携しようとしたことはなかったとされる³⁾。

ボバンはテルジッチの主張が学術的な批判に耐えないことを明らかにしたが、1941年4月戦争の敗因やユーゴスラヴィア王国崩壊の原因について積極的に自らの見解を述べたわけではなかった。その後1990年代初めの連邦国家の解体と内戦の発生によって、両国の研究者はこのような問題について学術的に議論することが困難な状況になった。この状況は2000年代に入っても変わらず、両国の研究者の見解の相違は平行線のままである⁴⁾。したがって、1941年4月のユーゴスラヴィア軍と王国の崩壊をどうみるかはなお未決着の問題である。この問題を考察するためには戦争の一面だけに焦点を当てるだけでは不十分であり、この国の外交・防衛政策、内政問題との関連を含めて多面的に要因を分析する必要がある。そこで本稿ではユ

ーゴスラヴィア王国の崩壊に至る道を検証し、この国の軍隊の敗北と王国崩壊の原因について試論を提示したい。

2 三国同盟への加入

1939年9月2日、第二次世界大戦が始まった翌日、ユーゴスラヴィアは中立を宣言した。これはドイツにとっては好都合な態度だった。ヒトラーはバルカン半島の平和を望んでいた。その第一の理由はこの地域がドイツにとって食糧や資源の供給地であったからである。とくにルーマニアは唯一の石油の供給地であり、ユーゴスラヴィアは農産物と鉱物資源の主要な供給地であった。実際、開戦の当初からヒトラーはバルカン半島に領土野心のないことを何度も述べ、この地域を戦争の局外に置くことを表明していた。第二にイギリス本島に対する直接攻撃に失敗したヒトラーは1940年代の後半、その代替戦略として、ジブラルタル海峡の制圧、エジプトおよびスエズ運河の占領、ソ連攻撃を計画していた。こうした多面的な作戦行動を成功させるためにも、地理的に背後に位置するバルカン半島の平和をドイツは是が非でも確保する必要があった。

イタリアはバルカン半島に領土要求をもっていたがドイツの方針に従っていた⁵⁾。しかし、ムッソリーニは10月7日にイタリアに通告なくドイツ軍がルーマニアに進駐したことに憤慨し、同様の行為でヒトラーに返礼しようとして、10月15日、ギリシア侵攻を決意した。1940年10月28日、イタリアはギリシア政府に最後通牒を突き付け、テロ活動の撲滅を名目にギリシア領土内のいくつかの戦略拠点の明け渡しを要求した。ギリシア政府がこれを拒否すると、アルバニアのイタリア軍は侵攻を開始した。ムッソリーニは短期間でギリシアを制圧できると考えていたが、その後の展開は予想に反していた。ギリシアに攻め込んだイタリア軍は数日のうちに押し戻され、攻勢に転じたギリシア軍にアルバニアの拠点を占領される有様となった。さらに11月11日、イタリアと交戦状態にあったイギリスは、ギリシアを支援するため、イタリアの軍港タラントを空襲した。この攻撃によっ

てイギリスはイタリアの戦艦三隻を撃破し、東地中海の制海権を握った。イギリス軍はクレタ島に陸軍を進駐させ、ギリシア本土への上陸の機会を窺った。また12月9日には北アフリカ戦線でもイギリス軍はイタリア軍を破った。

ムッソリーニが独断でギリシア侵攻を強行し、しかも失敗してイギリスの進出を招いたことにヒトラーは激怒したが、情勢からみてイタリアを救援せざるをえなかった。もしイギリスがギリシアに軍事拠点を築けば、対ソ攻撃に向かうドイツ軍は背後に大きな脅威を残すことになるからである。とくにクレタ島にイギリスが空軍基地を建設するとドイツの生命線であるルーマニアの油田が空爆可能な範囲に入ってしまう恐れがあった。それゆえ、ヒトラーはギリシア戦線への介入を決意し、12月13日にマリタ作戦と命名された攻撃計画の準備を国防軍司令部に指示した。しかし、ドイツがこの攻撃を実行するためには補給線を確保する必要があった。すでにバルカン半島の親樞軸国はドイツの経済的な支配下にあったが、ヒトラーはこれらの国々に対し、1940年9月27日に日独伊が締結した三国同盟への加入を求めた。ドイツの圧力に屈し、1940年11月下旬にルーマニアとハンガリーが三国同盟に加入し、1941年3月初めにはブルガリアがこれに加入した。残るはユーゴスラヴィアだけであった。

1940年11月28日、ヒトラーはユーゴスラヴィア外相のツィンツァル・マルコヴィッチをウィーンに招き、ユーゴスラヴィア、ドイツ、イタリアの三国間での不可侵条約の締結を提案した。12月7日、ベオグラード駐在のドイツ大使に対し、ツィンツァル・マルコヴィッチはこの提案を受け入れる趣旨の覚え書きを手渡した。しかし、これを受け取ったヒトラーは要求を引き上げ、12月22日、ドイツ大使を通して三国同盟への加入を要請した⁶⁾。ユーゴスラヴィア政府は回答を引き延ばしにしていたが、1941年1月半ばに交渉を再開し、ドイツ政府との首脳会談を提案した。2月14日、両国政府の首脳会談がヒトラーのウィーンの山荘で実現した。このときユーゴスラヴィアのツヴェトコヴィッチ首相は、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、トルコの三国がブロックを結成し、ギリシア戦争

への介入をやめるようにイギリスを説得する案を提示した。しかし、ヒトラーはこれに興味を示さなかった。彼は、バルカン半島の情勢に対してユーゴスラヴィアが明確な態度をとることがヨーロッパの新秩序とユーゴスラヴィア自身の利益になると述べ、三国同盟への早期加入を促した。これに対して、ツヴェトコヴィッチらはヒトラーの話を最高指導者のパヴレ公に伝え、できるだけ早く政府の公式的な態度を示したいと回答した⁷⁾。

このときヒトラーは摂政パヴレとの会談を望んだので、ユーゴスラヴィア側もこれに応じざるを得なくなった。3月4日、ヒトラーはパヴレをウィーンの本荘に招いた。二人の会談は5時間に及んだ。ヒトラーはイギリスが敗北するのは時間の問題であり、ヨーロッパの新秩序をユーゴスラヴィアが受け入れるべきだと主張した。さらに彼は、三国同盟に加入すればユーゴスラヴィアの領土はあらゆる危険から保全されるだけでなく、ギリシアの崩壊のあとにはサラニカを獲得してエーゲ海への出口を確保できると述べ、ドイツとの同盟関係のメリットを強調した。これに対して、パヴレは、ユーゴスラヴィアは引き続き中立を守ることが最良の策だと考えたと述べた。彼は、彼の妻がギリシア出身であること、イギリスとの友好関係、イタリアに対する反感が三国同盟への加入をためらわせる障害だと説明した。とくに前国王アレクサンデルの暗殺に加担し、今もクロアチアにテロリストを送り続けるムツリーニと手を結ぶことはできないと強調した。しかし、マリタ作戦と対ソ攻撃を間近に控えていたヒトラーは引き下がらず、態度を明確にするように求めた。パヴレは、国土の軍事的な利用を枢軸国に許可する規定は国民が納得しないとなお難色を示した。これに対して、ヒトラーはユーゴスラヴィアが三国同盟に加入しても国内をドイツ軍が通過することを求めないと述べ、決断を迫った。パヴレは非常に重大な問題なので政治顧問や政府側と協議したいと述べ、即答を避けた⁸⁾。

パヴレは帰国後直ちに王国顧問会議を招集した。3月6日開催の会議には、パヴレを含めて三人の摂政、首相のツヴェトコヴィッチ、副首相のマチェック、外相のツィンツァル・マルコヴィッチ、

国防相のベシッチ、スロヴェニア人閣僚のクロヴェッツ、宮廷庁長官のアンティッチが参加した。パヴレはヒトラーとの会談内容を報告し、出席者の意見を求めた。最初に発言したツヴェトコヴィッチ首相は三国同盟の危険性を指摘し、当面あいまいな態度をとったほうがよいという考えを示した。その上で彼は、もしドイツが三国同盟入りを強要した場合にはイギリスとトルコに助けを求め、抵抗の構えを示すべきだと述べた。しかし、国防相のベシッチはこれに反対する見解を示した。彼の考えは、ユーゴスラヴィアは戦争の準備が整っておらず、周囲を包囲する枢軸国と戦うことになればすぐに敗北することは明らかであるので、三国同盟への加入によって戦争に巻き込まれることを避けたいということであった。クロアチア人の指導者で副首相のマチェックは最終的な判断は国防の責任者の見解を聞いた上で初めて可能となると述べ、国防相のベシッチに対し、国軍の指導部も国防相と同じ見解なのかを質した。ベシッチは、自分の見解は参謀総長を始め国軍の指導部との協議の結果であると答えた。さらにマチェックは外相に対し二つの質問をした。一つはユーゴスラヴィアの将来に対してドイツはいかなる保証を与えているかであり、もう一つはヒトラーの約束を信じていることができるかであった。外相のツィンツァル・マルコヴィッチは三国同盟加入にあたりドイツ側がユーゴスラヴィアに破格の好条件を提示し、ヒトラーとリベントロップがイタリアも同様の保証を与えると約束していると答えた。彼はもし三国同盟を拒否すれば周辺の諸国から国境線の修正要求が出る可能性があるかと付け加えた。国防相と外相の見解を聞いたマチェックは彼らの説明に納得した。スロヴェニア人代表のクロヴェッツは今回の戦争はまだ初期段階にあり、たとえ数ヶ月であっても戦争に巻き込まれるのを避けたほうがよいという考えを示し、そのためには三国同盟に加入するしかないと述べた。最後に首相のツヴェトコヴィッチは会議をまとめ、出席者の全員が条件付で三国同盟への加入に賛成することを確認した。その条件とは、ヒトラーが前回の会談でユーゴスラヴィア側に提示したいくつかの譲歩と約束を保証することであった⁹⁾。

ツィンツァル・マルコヴィッチは翌日、ドイツ大使のフォン・ヘーレンを招き、王国顧問会議の結果を伝えた。その上で、三国同盟の加入に際し、次の事項について、ドイツおよびイタリアから文書による確約をユーゴスラヴィア政府は得ることができるかを尋ねた。1. ユーゴスラヴィアの主権と領土の一体性を保全すること。2. 戦争が起こっても、ユーゴスラヴィアに対して軍事的な協力を一切求めず、またユーゴスラヴィア国内を枢軸国軍の部隊や物資が通過することを要求しない。3. ヨーロッパの新秩序を形成する際には、サロニカ港を通してエーゲ海への自由な通路を確保したいというユーゴスラヴィアの願望を考慮する。ツィンツァル・マルコヴィッチは、以上の事項はこれまでの交渉の中で合意されていると理解しているが、ドイツ政府が文書による保証を与えてくれればユーゴスラヴィア政府は望ましい決定をおこなうことが楽になると述べた¹⁰⁾。

ところで、連合国の陣営はユーゴスラヴィアの動向を座視したわけではなかった。1941年1月、アメリカ大統領ルーズベルトはベオグラードに特使としてドノバン大佐を派遣した。彼は、政府と摂政パヴレの政策に反対するあらゆる勢力と接触し、彼らの影響力を高めようと画策した。またヒトラーとパヴレとの会談後、ベオグラード駐在のアメリカ大使とイギリス大使は、ユーゴスラヴィア政府に対しヒトラーの提案を拒否するように精力的に働きかけた。アテネに滞在していたイギリス外相のエデンは、パヴレに対しキプロスで極秘に会談したいと打診した。3月7日、パヴレがこれを断ると、エデンはイギリス大使を通し、ユーゴスラヴィアが少なくとも行動の自由を保持しておくようにとメモを送った。これを受け取ったパヴレは国防相のペシッチを呼び、ギリシア・イギリス連合軍司令部に総司令部の代表を派遣し、軍事作戦上の協議をおこなうように指示した。この指示に従い、ペルシッチ少尉がアテネに派遣された¹¹⁾。三国同盟への加入を原則的に決めた3月6日の王国顧問会議のあともパヴレはなお迷いがあることをアメリカ大使に打ち明けていた。そのため、彼は、三国同盟への加入を拒否し、枢軸国から攻撃を受けた場合に、イギリスがどれだけの軍

事的支援をしてくれるのかを確かめようとした。

3月9日、アテネのイギリス大使館でユーゴスラヴィア軍総司令部代表のペルシッチ少尉とイギリス・ギリシア連合軍総司令部指揮官との協議が実施された。ユーゴスラヴィア軍の首脳部は、枢軸国から攻撃を受けた場合には抵抗を続けながら二手に分かれて兵力を撤退させていく作戦を考えていた。一つは南方に向かい、ギリシア国境を越えてエーゲ海方面へ撤退するグループであり、もう一つは西方に向かい、アドリア海方面へ撤退するグループである。ユーゴスラヴィア側は、イギリス・ギリシア側に対しこの撤退が安全に安全確実に実行できるように支援が得られるかを確かめようとした¹²⁾。この問いに対する回答にはロンドン政府との協議を必要としたので、これを待って3月12日にペルシッチ少尉とイギリス・ギリシア軍側との協議が再開された。

イギリス・ギリシア軍側の回答は、第一にユーゴスラヴィアが実際に連合国の側に立って参戦し、ユーゴスラヴィア軍の作戦行動と戦略のアウトラインを窺い知るようにならなければ、質問に対する正確で最終的な回答を与えることはできないということであった。しかし、連合国側は、この留保条件のもとでユーゴスラヴィア側の質問にこう答えた。南方への撤退を強いられたユーゴスラヴィアの部隊に対してはエーゲ海までの撤退が安全確実に実行できるようにイギリス・ギリシア連合軍は最大限の支援をおこなう。また連合国軍は、ユーゴスラヴィア側の要求どおり、ユーゴスラヴィア軍の体勢の立て直しが完了するまでの期間にあらゆる種類の軍事物資を供与すると約束した。ただし、アドリア海方面へ撤退する部隊を艦船によって移送してほしいという要請に対しては、イギリス側は危険度が高く、困難だと述べ、事実上これを拒否した。彼らはむしろ、西方へ撤退するユーゴスラヴィアの部隊は、アルバニアでイタリア軍と戦っているギリシア軍と合流するのが最良の策だと提案した。そうすれば、アルバニアの占領作戦はより早く完了し、港湾や空港を確保できて、ギリシアとの交通路が確立するからであった。最後にイギリス・ギリシア連合軍は、ユーゴスラヴィアの部隊の撤退を支援する部隊は必要な時期

に直ちに出兵できるように待機しておく」と回答した。このあとユーゴスラヴィア軍代表のベルシッチは直ちにアテネを立ち、3月15日、連合国側の回答を総司令部と国防相に報告した¹³⁾。

しかし、この間にもドイツ政府との交渉は進んでいた。3月9日には、3月7日にドイツ大使を通して打診されていたユーゴスラヴィア側の要請にヒトラーが同意したことをドイツ政府は伝えた。ところが、ドイツ政府はすぐに一部を撤回し、三国同盟の性格上、ユーゴスラヴィアに対し軍事協力の義務をまったく免除するわけにはいかないと主張してきた。外相のツィンツァル-マルコヴィッチはドイツ側の主張の受け入れに難色を示した。3月12日にドイツ政府は妥協案を示した。それは、枢軸国の側はユーゴスラヴィアに対し軍事協力を要求することはないが、ユーゴスラヴィアがその国益のために自発的に軍事作戦に参加を望んだ場合には合同の作戦行動をとるということであった。これを受けて同日、王国顧問会議が再び開催された。このとき議論されたのはドイツ側の修正提案の意図であった。ドイツは遅かれ早かれ親独派の人物を政権の座に据えて自発的に軍事協力を提案させ、ユーゴスラヴィアを参戦させる計画ではないかとパヴレ公は考えた¹⁴⁾。したがって、この日の会議の結論はドイツ側の求める修正は受け入れられないということであった。外相のツィンツァル-マルコヴィッチはこれを直ちにドイツ政府に伝えた。3月14日に届いた回答ではドイツ側は修正案を取り下げることはなかったが、ユーゴスラヴィアに軍事協力を求めないことを重ねて約束した。3月17日に開催の王国顧問会議は三国同盟への加入を原則的に承認し、ツィンツァル-マルコヴィッチはドイツ大使にこれを伝えた¹⁵⁾。

一方、ユーゴスラヴィア軍指導部はベルシッチ少尉と連合国との協議の結果を直ちに検討した。イギリス・ギリシア側はユーゴスラヴィア側の要求に満額回答をしなかったが、大筋でこれを認めようとした。しかし、ユーゴスラヴィア側にとって連合国側の回答は貧弱な内容しか提示されていないように見えた。結局、ユーゴスラヴィア軍指導部はドイツの攻撃に抵抗できるほどの支援を連合国側からは期待できないと判断し、戦争を避け

るためにはドイツとの交渉を続けるほかないと政府に報告した¹⁶⁾。イギリス外相のエデンは特使を派遣しパヴレ公にメッセージを伝えたが、成果はなかった¹⁷⁾。3月19日に三国同盟加入に関する議定書の案文は完成した。3月20日に招集された王国顧問会議はこれを承認し、政府と政党指導者に伝えることを決議した。同日夕刻に首相のツヴェトコヴィッチは閣議を開き、王国顧問会議の決定を了承し、三国同盟加入の議定書への署名を提案した。この提案に対して副首相のマチュックが最初に支持を表明し、これに続いて15人の閣僚が賛意を示した。ところが、3人のセルビア人閣僚がこれに反対を表明した¹⁸⁾。しかし、ツヴェトコヴィッチは大多数の閣僚は賛成しているとして、提案は了承されたという結論を出した。3月23日、王国顧問会議が召集され、ツヴェトコヴィッチ首相とツィンツァル-マルコヴィッチ外相を全権代表としてウィーンに派遣することを決定した¹⁹⁾。

3月25日、ウィーンに到着した二人はベルヴェデーレ宮殿で三国同盟加入の議定書に署名をした。この署名の前にユーゴスラヴィア代表はドイツ外相のリベントロップから三種類の念書を受け取った。第一の念書はユーゴスラヴィアの主権と領土の一体性を枢軸国が保全することを保証し、第二の念書は戦争が起こっても枢軸国は部隊や物資の通過をユーゴスラヴィアに要求することはないと述べていた。第三の念書は、ユーゴスラヴィアが自発的に作戦行動に参加を望んだ場合を除いて、枢軸国がユーゴスラヴィアに軍事的な協力を要求することはないことが記されていた。イタリア外相のチャーノも同様の内容の念書を提出した。さらにこの日に手渡されなかったが、ユーゴスラヴィア代表に対しドイツとイタリアは第四の念書を用意していた。それは、将来バルカン半島の国境線を確定する際にはサラニカの都市および港にユーゴスラヴィアの主権を拡大し、エーゲ海との領土的な関係を求める同国の利益に配慮すると記していた。これは枢軸国の勝利の暁にはギリシア領サラニカをユーゴスラヴィアに割譲することを意味していた。以上のうち、ユーゴスラヴィアの主権と領土の保全、および枢軸国の物資と部隊の国内通過を求めないことは公表を予定されていたが、

他の二つは秘密協定とされた²⁰⁾。

3 3月27日クーデターとその後の状況

ユーゴスラヴィア軍の将校の中には政府の外交政策に不満をもつグループがあり、このことは宮廷も察知していた。そのリーダーと見なされていた人物は空軍司令官を務めていたドゥシャン・シモヴィッチ将軍であった。折しもユーゴスラヴィアの指導層が三国同盟への加入を議論している最中にシモヴィッチは国防相のペシッチや参謀総長のコシッチと面会し、ドイツの要請の受諾を受諾するのは危険だと指摘していた。反対派の動向を危惧したパヴレは3月半ばにシモヴィッチを宮廷に呼び、その意見を聞いた。シモヴィッチは政府の親枢軸国政策に対する国民および軍部の不満をパヴレに伝え、外交路線の変更を強く求めた²¹⁾。三国同盟の加入を直前に控えた3月23日にもパヴレはシモヴィッチを宮廷に呼んだ。このときシモヴィッチは、もし政府が議定書に署名した場合には民衆は革命を起こし、ベオグラードの部隊はこれに応じて決起すると警告した²²⁾。パヴレから相談を受けたツヴェトコヴィッチとマチェックはシモヴィッチの身柄の拘束を進言した。しかし、国防相のペシッチはシモヴィッチが危険な人物ではないことを強調し、これを信じたパヴレはシモヴィッチの逮捕の命令を下さなかった²³⁾。

3月26日、パヴレはウィーンから戻ったツヴェトコヴィッチ首相の報告を聞いたあと、スロヴェニアの別邸で静養するため、ベオグラードを離れた。反政府派の将校団がクーデターを執行したのはその日の深夜であった。シモヴィッチと共謀し、実際に行動を指揮したのはポーラ・ミルコヴィッチ将軍と空軍将校であり、彼らは事前の計画に沿って、3月27日の午前1時には首都ベオグラードのすべての拠点に兵士を配置し、閣僚の身柄を拘束した。シモヴィッチは、政府閣僚、主要な野党代表、それにジフコヴィッチ将軍を国防省に招き、ツヴェトコヴィッチ政権とパヴレ公を筆頭とする摂政団を放逐すると共にペータル国王が成年に達したことを宣言すると通告した。このあとシモヴィッチは居合わせた政党代表者と新政府の陣容を

協議した。シモヴィッチは、新内閣は主要な政治集団がすべて参加する挙国一致内閣とし、クロアチア農民党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構から選出されている前政権の閣僚は留任させるという方針を提示し、セルビアの野党はこれを了承した。首相にはシモヴィッチ自身が就任し、クロアチア農民党党首のマチェックならびにセルビア文化クラブ代表のスロボダン・ヨヴァノヴィッチを副首相に任命することが取り決められた。午前7時半にはラジオ放送で事前に用意されていたペータル国王の声明が読み上げられ、政変の結果が国民に知らされた。

マチェックはクーデターの前日にザグレブに戻っていた。3月27日早朝、クロアチア農民党幹部で法相のシューテイはマチェックに電話で連絡し、ベオグラードの政変とシモヴィッチからの入閣要請を伝えた。マチェックは他の仲間の意見を聞く必要があると述べ、即答を避けた。彼は直ちに側近のクルニエヴィッチとコシュティッチを呼んだが、このあとザグレブの警察署長が訪れ、摂政パヴレを乗せた王室特別列車がザグレブ駅に停車していることを知らせた。列車は、クロアチア方面指揮官のネデリコヴィッチ将軍が率いる部隊の監視下にあった。マチェックは直ちに駅に向かい、パヴレをザグレブの市内に連れ出した。行き先はクロアチア州の知事室であった。

パヴレとマチェックは事態にどう対処するかを話し合った。この協議にはクロアチア農民党指導部からシュバシッチ（クロアチア州知事）、クルニエヴィッチ（クロアチア農民党総書記）、コシュティッチ（同党副党首）が加わった。マチェックはベオグラード駐在の党幹部から情勢はまだ流動的だという報告を得ていた。そのため、彼はザグレブとその周辺のクロアチア人部隊に動員をかければ十分な兵員を確保でき、クーデター派と対等に交渉ができるという考えを示した。この計画を実行するため、マチェックはネデリコヴィッチ将軍を更迭し、その副官のマリッチ将軍（クロアチア人）を新たな指揮官に任命するようにパヴレに進言した。だがパヴレは思案の末、この提案を却下した。彼は国王権力に対する反逆者になることを恐れ、またベオグラードに残した妻子の身の安全

を危惧した。彼は家族と共にギリシアに行くことが唯一の願いであり、その許可を新政権に求めたいと語った。会談の最中にシモヴィッチから電話が入り、マチェックとの話し合いを求めた。シモヴィッチはマチェックに対し、新政府にはすべての政党が加わることになっているので、クロアチア農民党の他のメンバーと共に入閣して欲しいと伝えた。このときシモヴィッチは、新政府はクロアチア州の設置を認めた1939年8月26日協定を承認するだけでなく、クロアチアの自治権限の拡大も認めたいと語った。マチェックはクロアチア農民党代表の入閣を了承したが、自身の処遇については留保し、今後の事態の推移をみたいと伝えた²⁴⁾。

ネデリコヴィッチ將軍はパヴレをベオグラードに戻すように指示を受けていることを告げた。パヴレ公はこれに同意し、3月27日正午に王室特別列車はザグレブを発った。その際、クロアチア州知事のシュバシッチが同行を申し出た。同時に彼はこの機会にベオグラードの政情を調べてくるようにマチェックから指示されていた。ベオグラード駅に到着したパヴレ公は直ちに国防省に連行された。彼はシモヴィッチ將軍から状況の説明を受けたあと、摂政の地位の退任を国王に申し出る文書に署名をした。他の二人の摂政も同じ文書に署名をした。このあとパヴレは妻子と共にギリシアに向けて出国した。これによって摂政団による国王権力代行体制は幕を閉じた。

特筆すべきことはこの政変は反対派との衝突はなく、無血クーデターに等しかったことである。パヴレ公を嫌っていたセルビアの人民はこの政変を歓迎した。ベオグラードでは大勢の群衆が街頭に繰り出し、クーデターの成功に歓喜の声を上げた。このときに叫ばれた有名なスローガンが、「三国同盟加入よりは戦争を」、「奴隷になるくらいなら墓場に行こう」、「自由万歳、さらば奴隷制」等であった。国外ではイギリスの新聞とラジオがいち早くベオグラードの政変を報じた。イギリスのメディアと政府関係者はこぞってクーデターの成功に賛辞を送ると共に、三国同盟への加入を決めたツヴェトコヴィッチ政権とパヴレ公に非難の言葉を浴びせた。会議の直前にベオグラードの政変

の第一報を聞いた首相のチャーチルは演説の中で「ユーゴスラヴィアの国民はその意気地を示した」と述べたほどであった²⁵⁾。

クーデターに際し影の参謀を務めたミルコヴィッチ將軍は単純にツヴェトコヴィッチ政権とパヴレ公を追放することを目的としていた。彼は、この政変が成就した場合にユーゴスラヴィアがどのような状況に置かれるのかを考えることなく、行動を起こした。生粋の軍人であったミルコヴィッチは政治に参加する野心はなく、国軍による権力の掌握が完了すると事後の処理をシモヴィッチ將軍に任せて自分の持ち場に戻った。しかし、このあと国政の指導を担当することになったシモヴィッチ將軍には困難な現実が待ち受けていた。彼は急いで二つの問題に取り組まなければならなかった。一つはクロアチア人指導者のマチェックを政権に参加させることであり、もう一つは枢軸国、とくにドイツとの関係を損ねないようにすることであった。

シモヴィッチらはツヴェトコヴィッチ政権とパヴレ公の政策をもはや容認できないと考え、クーデターを起こした。したがって、彼らはクロアチア人に過大な譲歩を認めた1939年8月26日協定は見直すべきであり、三国同盟への加入協定は破棄すべきだと考えていた。これについては、政権に参加したセルビアの政党指導者もまったく同じ考えであった。しかし、これらの課題は現下の情勢では実行不可能であった。第一に8月26日協定の見直しはクロアチア人の反発を招き、国家の分裂に直結する恐れが大きかった。むしろ、戦争の危機が迫る現下の状況ではさらなる譲歩をおこなってでもクロアチア人の政治的協力を確保し、国家の統一を維持することが必要であった。第二にドイツはギリシア攻撃のために隣国のブルガリアに精鋭部隊を集結させていた。いま三国同盟を破棄すれば、この部隊がユーゴスラヴィア攻撃に向けられることが容易に想定された。ところが、政変が起こったばかりのユーゴスラヴィアは枢軸国の攻撃を迎え撃つ準備ができていなかった。したがって、少なくともユーゴスラヴィア側が防御を固めるまでは、枢軸国に攻撃の口実を与えてはならなかった。そのためには、当面の間は枢軸国との

友好関係を維持していくことが不可欠であった。

新しい政府の副首相にマチェックがなることはすでに発表されていたが、まだ彼はベオグラードに姿を見せていなかった。マチェックはこのとき二つの問題に重大な関心をもっていた。一つは8月26日協定がこれまで通り遵守されるかという問題であり、もう一つはユーゴスラヴィアが枢軸国との戦争を回避できるかという問題であった。マチェックはクロアチアの将来をひどく不安に思うと共に、国家の存続と国民の生活を危うくさせたベオグラードの無責任なグループに大きな怒りを感じていた。このときすでにユーゴスラヴィアに対する攻撃を決定していたドイツはこの国を分割支配するためクロアチアに傀儡国家を作る計画をもっており、そのためにマチェックとクロアチア農民党の協力を得たいと考えていた。この目的でドイツ政府はザグレブに諜報部員を派遣し、ベオグラード政府への離反とドイツ側への協力をマチェックに働きかけていた²⁶⁾。

しかし、マチェックは、枢軸国との戦争を回避し、クロアチアの自治権を維持するためには新政権に協力しないわけにはいかなないと考えた。ただ最終的な判断に至るまでは慎重であり、彼はできるだけ状況を見極めようとした。クロアチアの自治については、すでに述べたようにシモヴィッチは協定の遵守をマチェックに直接伝えていたが、さらに3月27日夜、クロアチア州知事シュバシッチの同席のもとで閣議を開き、8月26日協定によって定められたクロアチア州の地位にはいささかの変更もないことを内閣として確認した。しかし、マチェックはこれに満足しなかった。彼はさらに副党首のコシュティッチをベオグラードに派遣し、シモヴィッチと話し合いをさせた²⁷⁾。その報告を受けて、4月1日、マチェックは側近の党幹部を集めて会議を開き、彼自身も政権に加わることを決定した。翌日彼はシューテイ、スモーリヤン、コシュティッチをベオグラードに派遣し、この決定をシモヴィッチに伝えた。この日の会議では、政府が外国に亡命しなければならなくなった場合、マチェックは辞表を提出し、党書記のクルニェヴィッチを後任に据えることも申し合わせた。4月4日朝、マチェックはベオグラードに到着し、正

式に副首相に就任した。

枢軸国との関係については、イタリアおよびドイツ政府の要人と親交があったモムチロ・ニンチッチが15年ぶりに外相の地位に復帰した。彼は就任早々の3月27日、ドイツ大使のフォン・ヘーレンを招き、この日の政変の意味を説明した。その際、ニンチッチはクーデターが起こったのは、パヴレ公とツヴェトコヴィッチ政権がセルビア人民の間に信望を得ていなかったためだと述べ、この政変がもつぱら内政上の問題に起因することを強調した。彼は、新政府にはセルビアのすべての政党が参加し、全人民を代表する政権が形成されたと述べ、新政権の安定性をアピールした。さらにニンチッチは、自分が外相に指名されたのは枢軸国との友好関係、とくにドイツとの協力関係を継続させるためであり、この方針はまもなく発表される新政府の声明の中で明言されることになるだろうと語った。しかし、ドイツ大使の関心は3月25日にツヴェトコヴィッチが署名した条約がどのような扱いを受けるのかにあった。それゆえ、ヘーレンは三国同盟に対して新政府はどのような態度をとるのかと質問したが、ニンチッチはこの点に関してはまだ何も答えられないと述べた。ニンチッチ外相は、ユーゴスラヴィアは引き受けた責務を履行するだろうと個人的な観測を示したが、ドイツ大使はこの回答に納得しなかった。ヘーレンは、ユーゴスラヴィアが外交路線を変更したり、ドイツ市民の安全が脅かされたりするようなことになれば深刻な結果が生じるだろうとニンチッチに警告した。これに対して、政府はユーゴスラヴィアが置かれた状況をよく承知しており、また外交政策上の問題を理由とする抗議行動、とくに三国同盟に反対するようなデモを禁止する指示を出しているとニンチッチは答えた²⁸⁾。だがそれにもかかわらず、ドイツ人の住宅の壁には十字架の落書きが書かれた。ベオグラードにあるドイツの旅行会社の建物は打ち壊しにあい、ドイツ国旗が燃やされた。イタリアの事務所も同様の被害を受けた。ヘーレンは外務省に赴き、ニンチッチに対して事件を強く抗議した²⁹⁾。

しかし、ベルリンの反応は早かった。ベオグラードでクーデターが発生したという報告を受け、

ヒトラーは3月27日の夕刻、側近と国防軍の高官を総統官邸に招集した。彼はユーゴスラヴィアの情勢を分析し、その場でこの国に対する攻撃の準備を指示した。ヒトラーがユーゴスラヴィアの攻撃を即決した理由は、クーデターの成立によってこの国が今後の枢軸国の作戦行動（ギリシア攻撃と対ソ攻撃）の成功を妨げかねない不確実なファクターになったと判断したからであった。次の作戦行動の遅れ、とくにソ連攻撃の遅れを最小限にしたいと考えるヒトラーは、ユーゴスラヴィア側といかなる取引をする意思をもたなかった。そのため、彼はシモヴィッチ政権の態度表明をみることなく、ユーゴスラヴィアを軍事的にも国家的にも粉砕する準備に取りかかるように指示した。攻撃の前にはユーゴスラヴィアに外交上の問題を提起することも、最後通牒を突き付けることもせず、ただ実際の行動で知らしめるように命じた。この攻撃は、部隊と装備の準備ができ次第、開始すると決定された³⁰。

これに対して、ベオグラードのシモヴィッチは枢軸国の動向について楽観的な考えをもっていたといわざるを得ない³¹。彼は3月29日、イタリア大使のマメリーと会談した。その際、シモヴィッチは、個人的な見解として、ユーゴスラヴィアは周囲を敵に囲まれ、降伏を迫られるような事態は絶対に避けなければならないと述べた。しかし、その一方で彼はイタリア大使を啞然とさせるような発言をした。すなわち、もしギリシアのサロニカをドイツの部隊が占領した場合には、ユーゴスラヴィアはアルバニアの方面に活路を見いだすことになる論じたのである。ユーゴスラヴィアがそのような行動をとれば必然的にイタリアとの戦争になるとマメリーは警告したが、シモヴィッチは前言を取り消すことはなかった³²。イタリアはギリシアに戦争を仕掛けたが、逆にギリシア側にアルバニアを攻め込まれて窮地にあった。恐らくシモヴィッチはイタリアを牽制し、枢軸国とユーゴスラヴィアとの戦争の回避をイタリアに仲介するように促そうとしたとみられる。しかし、この日の会談の内容は直ちにドイツ大使を通してベルリンに伝えられた。ドイツ側はこれを新政権の好戦的性格を示す証拠だととらえた³³。

ユーゴスラヴィア政府がドイツ大使に三国同盟に対する態度を正式に明らかにしたのはクーデターから三日後の3月30日であった。この日の午前、外相のニンチッチはドイツ大使のヘーレンを招き、王国政府は、3月25日にウィーンで署名した議定書を含めてこれまでに締結した国家間の取り決めをすべて忠実に履行すること、現下の紛争に関係しないように断固たる決意で努力すること、そして隣国であるドイツおよびイタリアとの友好関係の維持に細心の注意を払うことを伝えた。新政府に三国同盟の承認をさせるという自己の目標が達成されたことをニンチッチは自賛し、もう少し時間が経てばこれまでの政府以上に信用してもらえるようになる述べた。しかし、これを聞いたドイツ大使の反応は冷ややかであった。ヘーレンはニンチッチ外相に対し、この声明は前日にシモヴィッチ首相がイタリア大使に示した見解とどう整合性があるのかと質した。シモヴィッチがそのような発言をしたことを知らなかったニンチッチはこれに驚き、それは政府としての見解を示したのではないと懸命に弁明した。ニンチッチはドイツ大使に明らかにした政府声明をイタリア大使にも伝え、また少し後にすべてのユーゴスラヴィアの在外公館に同様の趣旨の電文を送った。しかし、3月30日にヘーレンはドイツ外相のリベントロップから情勢報告のために直ちに本国に戻るよう指示を受け、ベオグラードを去った³⁴。

ドイツ大使の帰国は開戦が間近に迫ることを暗示した。このあとシモヴィッチ政権はドイツとの戦争を回避しようとして二つの方向で外交的努力をおこなった。その一つはドイツとの関係修復の仲介をイタリアに要請することだった。3月31日、シモヴィッチ首相はイタリア大使のマメリーを通して、4月1日に副首相のヨヴァノヴィッチをローマに派遣し、ムッソリーニと会談させたいとイタリア政府に打診した。イタリア外相のチアーノはこの訪問をいったんは受諾したが、数時間後に前言を翻し、延期を伝えるようにイタリア大使に指示した³⁵。

しかし、イタリアはなおユーゴスラヴィア側に希望を抱かせた。4月5日の閣議で外相のニンチッチは、ドイツとの関係修復を仲介したいとイタ

リア政府が提案していることを報告した。ただし条件があり、それはユーゴスラヴィア軍が直ちにギリシア国境の守備を固め、ギリシア・イギリス連合軍の進撃を阻止することであった。シモヴィッチはこれに同意したが、この機会にギリシア領のサロニカを占領したいと述べた。しかし、ニンチッチはそのようなことをすればドイツ軍のギリシアへの進路を妨害することになるし、他国の領土の侵害は中立を宣言したユーゴスラヴィアの声明に反すると述べて、強く反対した。とことが、シモヴィッチは自説に固執し、この日の閣議は何も決められなかった。ニンチッチ外相はイタリア側に回答の延期を要請せざるを得なかった³⁶⁾。

もう一つはソ連との同盟関係の構築である。政府はベオグラードのソ連大使館を通して軍事的・政治的協定の締結を打診していたが、4月1日にソ連外相のモロトフはこれに応じ、代表団を派遣するように要請した。モスクワでの交渉は当初順調に進むように見えたが、ドイツとの戦争に巻き込まれるのを恐れたスターリンの指示によって、ソ連側は友好・不可侵協定への変更を提案してきた。ユーゴスラヴィア側はこれを受け入れ、両国の間で友好・不可侵協定が締結された。ユーゴスラヴィアの代表が協定に署名したのは4月6日の未明であり、このときにはドイツの作戦行動は始まっていた³⁷⁾。

4 枢軸国の侵攻とユーゴスラヴィア王国の解体

1941年4月6日早朝、ベオグラードの上空にドイツの爆撃機が襲来した。4月3日に政府はベオグラード、ザグレブ、リュブリャーナの三都市を無防備の開放都市とすることを諸外国に通告し、攻撃の対象から免れようとした。しかし、ドイツはこれを無視し、ベオグラードの市街に容赦のない爆撃を加えた³⁸⁾。これと同時にドイツの地上部隊は旧オーストリア国境、ハンガリー国境、ルーマニア国境、ブルガリア国境からユーゴスラヴィア国内に侵入した。ヒトラーの事前の指示どおり、ドイツ側の攻撃には何の予告もなかった。

旧オーストリア国境から侵攻したドイツ軍はこ

の国の最北部のスロヴェニアを攻略し、クロアチア方面に向かった。ハンガリーに駐留していた部隊の一方はクロアチアの首府ザグレブに向かい、もう一方はサヴァ川に沿って西進し、首都ベオグラードをめざした。ルーマニアから侵入した部隊はドナウ川を越え、北方からベオグラードに迫った。ブルガリアに駐留していた部隊は南北二方向に分かれてユーゴスラヴィア南部に侵攻した。北方に進んだ部隊はセルビア中部を通過してベオグラードの南方に迫り、一部は方向を変えてこの国の最南部のマケドニアに向かった。南に進んだ部隊はいくつかに分かれてマケドニアに入り、一部はアルバニア国境をめざし、別の部隊はギリシア国境に向かった。ブルガリアから侵攻したドイツ軍はマケドニアを攻略したあと、ギリシア・イギリス軍を攻撃し、アルバニアのイタリア軍を救援する任務を負っていた。

ドイツの地上部隊は航空部隊の援護を受けて敵の防御陣地を次々と突破し、南部戦線では早くも4月7日にはマケドニアの中心地スコピエを陥落させた。北部戦線のドイツ軍は4月8日にはスロヴェニアならびにクロアチアの防衛線を突破した。中部戦線では4月9日にはドイツ軍はセルビア中部の要衝ニーシュを陥落させた。4月10日にドイツ軍はザグレブに進駐し、これに先立ってドイツ軍と内通したウスタシ指導者のクヴァルテルニクは「独立クロアチア国」の樹立を宣言した³⁹⁾。4月11日には南部戦線のドイツ部隊はマケドニアを完全に制圧した。北部戦線の一部の部隊はスロヴェニアとクロアチアの内地部に進軍し、この時点でイタリア軍が北西部の国境から越境を開始し、アドリア海沿岸部に沿って進軍した。4月11日にはドイツ軍はザグレブとベオグラードとを結ぶユーゴスラヴィアの大動脈ともいべき交通路を制圧した。またクロアチアの内部に進んだ部隊はアドリア海沿岸部に達し、イタリア軍と会合した。4月12日には三方向から集結したドイツ軍はベオグラードの包囲を完了した。この時点でハンガリー軍がヴォイヴォディナに侵入し、バチカ地方を占領した。

ドイツの空爆が始まるとユーゴスラヴィア政府と総司令部はすぐにベオグラードを去った。政府

閣僚と職員はセルビア西部のウジツァに向かい、その郊外のセヴォイノという村に臨時の行政府を設置した。ユーゴスラヴィア軍の参謀総長を兼務する首相のシモヴィッチは政府閣僚とは別行動をとり、国王と共に別の町（ハン・ピエサク）に逃れた。しかし、ドイツ軍が迫ってきたので、政府と総司令部は4月10日にはさらにボスニアに移動し、サラエヴォ郊外のパレという町に拠点を移した。しかし、サラエヴォをめざしドイツ軍は多方向から急進してきたので、ここも安全ではなくなった。そこで彼らは4月14日にはモンテネグロのニクシッチに移動した。この日、パレに残ったユーゴスラヴィア軍の総司令部は休戦交渉を開始し、やがて降伏文書に署名することを決意した。これを聞いたシモヴィッチらは急いで国外に脱出する行動をとった。4月15日、シモヴィッチ政権の閣僚と国王は三機の軍用機に分乗し、ギリシアに向けて出発した。彼らはいったんアテネで降り、そこから当時イギリス領だったパレスティナのエルサレムに落ち延びた。

この間、政府と総司令部は指導的な役割をほとんど果たすことができなかった。とくにドイツ軍のベオグラード空爆はユーゴスラヴィア軍の通信網に壊滅的な打撃を与え、総司令部と各地の部隊との意思疎通を遮断した。このため、総司令部は各戦線の状況を的確に把握できず、組織的な作戦行動を指示することが最初からできなかった。閣議の議事録⁴⁰⁾によれば、政府は4月6日の閣議で国民に徹底抗戦を呼びかける国王の宣言文を採択した。しかし、これはベオグラードの放送局が空爆によって破壊されたため、国民に伝えることができなかった。4月7日の閣議はユーゴスラヴィアの各地に各省を分散させることを決定したが、これも実行不可能なことであった。その後ニクシッチに移動するまでに閣議で審議された主要な問題は国庫に残っている資金をどう使うかであった。もっとも、政府が決めた資金の使い道はアルバニアにおける反枢軸国の政治活動の支援のための予算措置を除けば、閣僚と政府職員に給料として分配することだけであった⁴¹⁾。なおクロアチア人指導者のマチェックは「人民と運命を共にする」と述べて政府を去り、4月8日には自宅のあるクロ

アチアのクーピネッツに戻った⁴²⁾。

ユーゴスラヴィア軍は各地の戦線で敗走を重ね、4月13日には総崩れの状態になった。多くの兵士が敵方の捕虜となり、勝手に戦線を離脱する者も少なくなかった。枢軸国側の軍事的な勝利は明白であった。しかし、ユーゴスラヴィアの降伏は、誰が最終的な責任者なのかがきわめてわかりにくい形で決められた。その経過は以下のである。

4月13日朝、政府はユーゴスラヴィア国内での最後の会議となる閣議を開いた。はじめに首相と参謀総長を兼任するシモヴィッチ將軍は戦況を報告し、ユーゴスラヴィア軍はまだドイツ軍に抵抗を続ける能力があることを強調した⁴³⁾。このような非現実的な戦況報告のあとで、シモヴィッチは大事をとってモンテネグロのニクシッチに政府を移動させる必要があることと、参謀総長の職を副官に譲ることを決めたことを述べ、出席者の了承を得た。しかし、この日の閣議では枢軸国への降伏についても、政府の国外脱出についてもまったく議題に上らなかった。シモヴィッチは閣議のあとで国王に謁見し、参謀総長の辞任を申し出た。シモヴィッチは自分の後任に参謀次長のダニエロ・カラファトヴィッチ將軍を推薦し、国王の承認を得た。これによりシモヴィッチは戦闘の総指令官としての職務から解放され、首相職に専念することになった⁴⁴⁾。

しかし、このときシモヴィッチは、実際上は降伏の決断者としての責任を逃れ、不名誉な任務（敗戦の後始末）を部下に押しつけるための準備をしていた。

4月14日朝、シモヴィッチは参謀総長への任命を告げる勅令書をカラファトヴィッチに手渡した。これと同時にシモヴィッチは前日の閣議決定と称して次の三項目が書かれた公式文書を渡した。この文書の第一項目は、救援部隊の派遣や武器・食糧の供給など、すでに求めていた支援をできるだけ早く連合国から得られるようにあらゆる手段を尽くすように命じていた。第二の項目は、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロの山岳地帯の地形を利用して有効な抵抗を続けること、そのために直ちに必要な方策をとり、防衛戦線を立て直すように指示していた。ところが、

これと矛盾するような指示が第三項目にあった。それは、「緒戦での敗退による我が軍の状態、とくにクロアチアおよびダルマチアで起こった事件による我が軍の不本意な状況を考慮し、王国政府は貴殿に対し、直ちに敵方に休戦を要請する権限を委ねる」と述べていた。このときシモヴィッチはカラファトヴィッチに實際上、交渉の全権を委ねていた。なぜなら、彼が与えた文書は上記の文言に続けて「この点に関する貴殿の決定を王国政府は自身の決定として受け入れる」と明記していたからである⁴⁵⁾。

恐らくシモヴィッチはこの日、カラファトヴィッチに休戦交渉を指示していたに違いない。そう考えられるのは、カラファトヴィッチ将軍は参謀総長に就任するとすぐに休戦交渉の実行に取りかかったからである⁴⁶⁾。すなわち、彼は直ちにドイツおよびイタリアと休戦の交渉を開始するように部下の指揮官に指示した⁴⁷⁾。これを受けてミハイロ・ボーディ将軍を団長とする代表団が枢軸国の陣営に向かった。カラファトヴィッチ将軍は次の六項目を休戦協定の条件とするように指示していた。1. 休戦協定の発効を待つことなく即時停戦する。2. フランスのヴィシー政権のような体制を作り、できるだけ多くの領土の統治をユーゴスラヴィアに認める。3. 国家の秩序の維持のため、4万から5万の兵力の維持をユーゴスラヴィアに認める。4. ユーゴスラヴィア軍の兵士を捕虜収容所に入れない。5. 避難民ができるだけ早期に帰国できるように取りはからう。6. ユーゴスラヴィア軍の将校と下士官を戦争捕虜と見なさない⁴⁸⁾。

4月16日、ボーディらはベオグラードに入り、ドイツ国防軍第二軍司令官のワイフス将軍に休戦を申し入れ、その条件を伝えた。ドイツ側はそのような条件を受け入れる意思はまったくなかった。彼らが求めたのはユーゴスラヴィア軍の無条件降伏であった。ワイフス将軍はすでに前日（4月15日）にユーゴスラヴィア軍の総司令部に対しドイツ側の要求を伝え、全権代表の派遣を求めていると明かした。これはボーディらがまったく知らないことであった。ワイフスは、ユーゴスラヴィア代表が無条件降伏の文書に署名をおこなうまで、ドイツ側の作戦行動は続くと述べた。ボーディ将

軍は休戦の条件を伝えに來ただけであり、いかなる協定にも署名する権限をもたなかった。彼は急いでサラエヴォに戻り、その日のうちにカラファトヴィッチ将軍にドイツ側の要求を報告した⁴⁹⁾。

サラエヴォは4月15日にはドイツ軍の部隊に包囲され、ワイフス将軍が述べたように、無条件降伏を求めるドイツ側の休戦協定案がパレの総司令部に届けられていた。この協定案に同意することを決意したカラファトヴィッチ将軍は前外相のツィンツァル・マルコヴィッチとラディボエ・ヤンコヴィッチ将軍を全権代表としてベオグラードに派遣した。1941年4月17日の午後9時、二人はドイツとイタリアに対しユーゴスラヴィア王国軍の無条件降伏を認める文書に署名した。戦争を避けるためにツィンツァル・マルコヴィッチがツヴェトコヴィッチ前首相と共に三国同盟加入の議定書に署名したのは3月25日のことであった。それからわずか23日後に彼らの路線を否定し、ドイツとの戦争を招いたシモヴィッチ政権の代理人として彼が降伏文書に署名する任務を引き受けたのは誠に皮肉な結末であった⁵⁰⁾。休戦協定は翌日（4月18日）正午に発効した⁵¹⁾。

ドイツが突き付けた降伏文書はユーゴスラヴィア王国軍に将兵の投降と完全な武装解除、すべての兵器と備蓄物資の引き渡しを命じる大変厳しい内容を含んでいた⁵²⁾。しかし、ドイツはこの国の軍隊の解体だけで満足するつもりはなかった。彼らの戦争目的はユーゴスラヴィアの完全征服であった。この国への攻撃を決定した3月27日の会議の中でヒトラーはユーゴスラヴィアを軍事的に崩壊させるだけでなく国家としても粉碎せよと指示しており、これに沿ってドイツは開戦の前からこの国を解体する計画を作っていた。1941年4月20日、ドイツとイタリアの外相はウィーンで会談し、ユーゴスラヴィアの分割の仕方を協議した。ユーゴスラヴィアは無条件降伏への同意によってあたかも国家としての権利を失ったかのようにみなされ、その領土は一方的に枢軸国の陣営の間で分割されることになった。

まずユーゴスラヴィアの国土は基本的にドイツの勢力圏とイタリアの勢力圏に分けられた。その上でドイツはスロヴェニアの三分の二の地域、ヴ

オイヴォディナの西半分（バナート地方）、セルビアの中部地域を直接の統治下に置いた。このうちスロヴェニアの占領地はまもなくドイツ帝国に事実上併合された。セルビアについては、ドイツは4ヶ月後の8月29日に間接統治に移行させ、ユーゴスラヴィア王国軍の将軍で親枢軸国派のミラン・ネディッチを首相とする傀儡政権に行政を担当させた。バナートは公式的にはセルビアの一部とみなされたが、ドイツ人の多い地域であったため、ドイツはこの地域を引き続き直接的な統治下に置いた。

イタリアはスロヴェニアの三分の一の地域、ダルマチア地方の北半分の地域、ダルマチア地方南部のボキ・コタル湾を中心とした地域、ならびにモンテネグロを直接の統治下に置いた。このうち、ダルマチアの北半分は1915年に協商国と結んだロンドン条約がイタリアに割譲を約束していながらも、実行されなかった地域であった。またスロヴェニアの占領地はリュブリャーナ州としてイタリアに併合された。モンテネグロについては、当初は1918年にセルビアと合併した際に廃位となったペトロヴィッチ王朝を復活させることを枢軸国は合意していたが、これは実現しなかった。代わりにイタリアはユーゴスラヴィア王国の支配に不満をもっていた勢力に政権を担当させた。

枢軸国は彼らの衛星国にもユーゴスラヴィアの領土を分け与えた。イタリアの保護国であったアルバニアにはコソヴォ地方とマケドニア地方の一部が割譲され、大アルバニアが実現した。ブルガリアはセルビアの一部とマケドニア地方の残りの部分の統治をドイツから譲られた。ブルガリア政府はこれらの地域に自国の通貨や法律を導入すると共に行政機関を設置し、事実上自国に併合した。ハンガリーは1940年12月にユーゴスラヴィアと友好条約を交わし、恒久的な不戦協定を結んでいた国であった。しかし、彼らは4月11日に宣戦布告なしにユーゴスラヴィアに部隊を侵攻させ、ハンガリー人が多数居住する隣接地域であるメジウムーリエ、プレコムーリエ、バチカおよびバーラニャを占領した。ハンガリー政府はこれらの地域を民族的な解放地と称して、1941年末に自国に併合した。

しかし、枢軸国はユーゴスラヴィアの残りの地域を他の占領地域とは異なる取り扱いをした。すなわち、彼らは、イタリアが獲得したダルマチア地方を除くクロアチア州、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方、およびかつてはスラヴォニア地方の東端であったセルビアの一部を一つにまとめ、枢軸国の後見のもとにクロアチア人の自治国家を形成した。これもまた開戦前のヒトラーの指示に基づいておこなわれた政策であり、クロアチア人を枢軸国の占領政策に協力させることを狙っていた。枢軸国によって政権を委ねられた政治家は、クロアチア人分離主義の政治集団の中でイタリアに拠点を置いて活動していたウスタシの指導者アンテ・パヴェリッチであった⁵³⁾。

5 ユーゴスラヴィア軍および王国崩壊の要因

ドイツと戦うことになった場合、ユーゴスラヴィアの敗北は最初から不可避的であった。そう考えられるのは次の二つの理由からである。第一に1941年3月1日にブルガリアが三国同盟に加入したことによって、ユーゴスラヴィアは枢軸国の陣営に包囲されてしまった。議定書への調印後、ドイツは直ちにブルガリアに部隊を進駐させ、ユーゴスラヴィアに圧力をかけた。3月19日までに4つの兵団が到着し、ドイツ国防軍は第12軍総司令部をソフィアに設置した。これによって、ドイツと戦うことになった場合、ユーゴスラヴィアは周辺五カ国の国境から同時に攻撃を受ける恐れが生じた。一方、連合国の側からは迅速な軍事的支援が得られる見込みはなかった。イギリスはユーゴスラヴィア軍の撤退を支援する意思を示したが、それは危険を冒さない範囲での支援でしかなかった。アメリカはまだヨーロッパに部隊を派遣しておらず、支援を期待できなかった。

第二に兵器に大きな差があった。ユーゴスラヴィア軍の装備はドイツと勝負にならなかった。ドイツ軍はよく整備された近代兵器をもち、しかも高度に訓練された要員がこれを操作していた。これに対して、ユーゴスラヴィア軍の兵器の近代化は遅れていた。たとえば、この国の歩兵部隊が使

用していた小銃や大砲の相当部分は第一次世界大戦時に使用していた機種であった⁵⁴。また無線設備はまったく乏しかった。中でも決定的に劣っていたのは近代戦の要となる空軍力と装甲装備であった。開戦時にユーゴスラヴィア軍が保有していた航空機は約300機であった⁵⁵。一方ドイツ軍は1941年3月27日の時点でルーマニアとブルガリアの基地に長距離爆撃機、急降下爆撃機、戦闘機、偵察機を合わせて400機を配置していたが、その後10日間で600機を追加配備した⁵⁶。装甲装備については、ドイツ軍は装甲師団をもち、戦車部隊や自動車化・機械化された歩兵部隊をもっていた。しかし、ユーゴスラヴィア軍にはそのような部隊は皆無であり、対空砲や対戦車砲も持ち合わせていなかった。この国の軍隊が保有していたのは110台の軽戦車であり、そのうち60%は第一次世界大戦時のモデルであった⁵⁷。

第二次世界大戦はまだ初期段階にあり、ドイツの軍事力はこのとき絶頂期にあった。このような状況でユーゴスラヴィアのような小国が単独で枢軸国に敵対することは自殺行為に等しかった。他方、ヒトラーはユーゴスラヴィアを三国同盟に加入させるため、この国の主権と領土の保全を約束しただけでなく、枢軸国に対する軍事協力の提供義務の免除を交渉の過程で確約していた。それゆえ、三国同盟に加入してもユーゴスラヴィアは実質的には中立を維持することが可能であった。このような破格の条件を考慮し、戦争に巻き込まれるのを回避するため、パヴレ公とツヴェトコヴィッチ政権が最終的に三国同盟への加入を決めたのはひとまずは賢明な判断であったといえるだろう。

もっとも、ヒトラーがこの約束を本当に守り続けるかはなほ疑問であり、ユーゴスラヴィアの指導層もこの点を最後まで不安に思った。実際、ヒトラーには約束破りの前歴があり、まさにこのときも独ソ不可侵条約を結んでいたソ連に対して攻撃の準備をしていた。したがって、ユーゴスラヴィアに認められた特権がいつまでも維持される保証はなかった。しかし、この時点では何よりも時間を稼ぐことが必要であった。なぜなら、このち戦局が連合国優位に転換すれば、ユーゴスラヴィアが三国同盟を離脱するチャンスが生まれる

可能性もあったからである。いずれにせよ、この時点ではヒトラーを挑発して性急な決断に走らせないようにすることが重要であった。ところが、ユーゴスラヴィア政府代表が三国同盟への加盟議定書に署名した翌日の夜にクーデターは起こり、これに激怒したヒトラーは直ちにこの国への攻撃を指示した。

ドイツ軍の指導部はユーゴスラヴィア軍の弱点をよく研究しており、短期間でこれを打破できると確信していた。しかし、それでもわずか12日間で作戦が終了したことは大きな驚きであった。何がこのような予想外の結果をもたらしたのだろうか。戦後の研究を総合すると、ユーゴスラヴィア側の問題点として、少なくとも三つの要因を指摘できる。第一に防御の体制が整っていなかったこと、第二に防衛計画が状況に適合していなかったこと、第三に将兵の士気が低かったことである。

第一の要因については、最大の問題は動員が開戦に間に合わなかったことである。ユーゴスラヴィア軍の兵員は1941年3月1日に30万人弱であった。その後ドイツ軍のブルガリア配置に対抗して、ユーゴスラヴィア軍は兵員を増強し、3月20日の時点での兵員は60万人弱に増加した。しかし、総動員令が発せられたのは3月30日であり、最初の入営日は4月3日であった⁵⁸。この動員が完了するとユーゴスラヴィア軍の現役兵は120万人、予備役等が50万人程度になるはずであった。しかし、それを待たずに戦争は4月6日に始まった。このときユーゴスラヴィア軍の兵員は70万人であり、したがってユーゴスラヴィアは動員可能な兵力の半分も召集できていなかった。この結果、戦争が始まったとき、人員が完全に充足されていた師団は一つもなかった。しかも、70万の兵力のうち40万人が徴集されたばかりの兵士であり、戦闘訓練が十分でなかった⁵⁹。

第二の要因については、枢軸国の脅威に備えるため、ユーゴスラヴィア軍の参謀本部は防衛計画をいくつか作成していた⁶⁰。しかし、それらはいずれも第一次世界大戦時のセルビア軍の成功体験に依拠した計画であった。その要点はこうである。まず敵の攻撃を想定して防衛線を構築し、そこで一定の抵抗を試みた後、ギリシア方面の連合国の

陣営に向けて撤退する。その後、連合軍の支援を受けて戦力を立て直し、反撃に転じて国土を解放する。しかし、第一次世界大戦時の発想でこの国を防衛しようとするには二つの点で無理があった。一つはユーゴスラヴィアが旧セルビア王国の数倍の国土をもち、しかも南部を除いて周囲のすべてで枢軸国諸国と国境を接していたことである。しかし、ユーゴスラヴィア軍指導部はこの点に無頓着であり、あらゆる地域に防衛線を構築しようとして、戦力を広く薄く分散していた。もう一つはドイツ軍の装備が進歩し、進軍の速度が格段に増していたことである。近代兵器と機動力を駆使したドイツ軍が得意の電撃戦で守りの手薄な敵方の防衛線を次々と突破したのは当然の結果であった。しかもドイツ軍の追撃は非常に速かった。このため、ユーゴスラヴィア側の防衛計画の要諦はギリシア方面への退路の確保であったが、ブルガリアから侵攻したドイツ軍は開戦の翌日にマケドニアの要衝スコピエを陥落させた。この時点で南部国境への退路が断たれ、ユーゴスラヴィア軍指導部が描いていたギリシアの連合軍との連携というシナリオは早くも崩れてしまった。

第三の問題については、まずクロアチア人部隊が最初から闘志を欠いていた。直接の原因はドイツとの同盟関係に関する考え方の不一致であった。セルビア人は三国同盟への加入をドイツの圧力に対する屈服ととらえ、これに激しく反対した。これに対して、クロアチア人はヒトラーに逆らって勝ち目のない抵抗を試みるよりは彼と妥協したほうが得策だと考えていた。それゆえ、ベオグラードの市民は3月27日のクーデターの成功に狂喜したが、これをザグレブの市民は国家を破滅の危機にさらす無謀な企てだと見なし、憤慨していた。この空気は軍隊にも広がり、クロアチア人が多数を占める第四軍が防衛を担当する北西部の戦線ではドイツ軍とともに戦おうとする部隊は少なかった。それどころかクロアチア人兵士の中にはドイツ軍をセルビアの抑圧からの解放者と考え、命令に反して勝手に戦線を離脱する者も多数現れた⁶¹⁾。

次にセルビア人の戦いぶりも第一次世界大戦のときと比べると明らかに粘り強さを欠いていた。その証拠として、ブルガリアから侵入しセルビア

中部の防衛線を突破してベオグラードをめざしたドイツ軍部隊（第1装甲集団）の進撃の早さは、ハンガリーから侵入しクロアチア人部隊が守るスラヴォニアを経由してベオグラードに向かったドイツ軍部隊（第66装甲兵団）と大して変わらなかった。4月12日に両者は相前後してベオグラードの郊外に到着し、これを包囲した。セルビア人部隊が守るユーゴスラヴィア南東部の戦線には険しい岩山が多く、曲がりくねった道路や未整備の狭い山道など機械化部隊の進軍が容易でない地点はいくつもあった。こうした条件をうまく利用すれば、ユーゴスラヴィア軍は有効な防御や抵抗を組織できたはずである。しかし、ドイツ軍は大きな障害に遭遇せずに進軍し、セルビア中部の要衝ニーシュを簡単に陥落させてしまった⁶²⁾。

ユーゴスラヴィア軍が生き残る道があったとすれば、それは最初から国土の大半を占める内陸部の山岳地帯に立て籠もり、持久戦に持ち込むことだけであったであろう。ドイツ軍が得意とした戦法は航空部隊と装甲車両を駆使した電撃戦であった。しかし、これは主に平地で威力を発揮する戦法であり、悪路が多く天候も変わりやすい山岳地帯では十全な適用が困難であった。したがって、ユーゴスラヴィア軍が各地で山岳地帯に戦力を集中させ、自然の条件を利用して防御を固めれば、装備で勝るドイツ軍もこれをそう簡単には攻め落とせなかったはずである。その上でユーゴスラヴィア軍が正面对決を避けてゲリラ戦に徹すれば兵力の損傷も少なく、両軍の戦闘は長期化したに違いない。

しかしながら、実際にはいくつかの障害があり、ユーゴスラヴィア軍の指導部がこのような戦術を採用することは非常に困難であった。第一にこの戦術の採用は都市部の防御を放棄することを前提としていた。しかし、このような作戦は恐らく政治指導者が承認せず、また榮譽ある正規軍の指導部は敵と一戦も交えずに退却することは論外と見なしたであろう。第二に山岳地帯での籠城には食糧や物資の補給面でその地域の住民の強力な支持と協力が必要であった。しかし、戦前のセルビアの優越支配に対する非セルビア人の反発を考えると、住民の側から支持や協力を得られる地域はユ

ユーゴスラヴィアの中では限られていた。第三にゲリラ戦の遂行には、教科書的な思考にとらわれず臨機応変に戦法を変える柔軟な発想が必要であり、また困難な条件で戦闘を続ける粘り強さが求められたが、これらは正規軍の職業軍人が持ち合わせていない資質であった。

最後にユーゴスラヴィア王国の崩壊については、国王と政府が早々と国外に脱出したことが大きな影響を与えたと考えられる。たしかにユーゴスラヴィア軍は総崩れになり、サラエヴォでドイツ軍に追い詰められたユーゴスラヴィア軍の総司令部は無条件降伏を選択した。しかし、この時点で枢軸国軍が制圧していた地域は主として都市部であり、ユーゴスラヴィアの内陸部には敵の手の及ばない地域が広範に残っていた。とくに王室に対する支持者の多いセルビアやモンテネグロの山岳地帯を拠点とし、この一帯にユーゴスラヴィア軍の敗残兵を集めて立て籠もれば、ユーゴスラヴィア政府はまだ国内での抵抗の余地があったはずである。最終的に国外に脱出するとしても、捲土重来を期すためには国内に信頼のできる人物を残

し、政府系勢力の抵抗運動の基盤を作っておく必要があった。そうすれば戦況が変わり、枢軸国が敗北した場合にユーゴスラヴィア王国再建の可能性も大いにあっただろう。

しかし、実際には政府首脳はユーゴスラヴィア軍の敗北が近づくとすぐに国王を連れて国外脱出を敢行した。首相のシモヴィッチ将軍らはドイツ軍に捕らえられ、クーデターの責任者として裁かれることを恐れたのであろう。しかし、このような自分らの身の安全のみを考えた行為は後に見捨てられた国民から大きな仕返しを受けることになった。結局、第二次世界大戦中にユーゴスラヴィア王国政府は国内で有効な抵抗運動を最後まで組織できず、パルチザン運動を指導した共産主義者に権力を奪われ、戦争が終わった後も王国を再建することができなかった。もちろん、共産党の権力の掌握過程についてはさらに詳細な検討が必要であるが、それを可能にした第一の要因はユーゴスラヴィア政府指導者の早すぎる逃亡であったことは間違いない。

注

- 1) Ilija Jukić, *The Fall of Yugoslavia*, Harcourt Brace Jovanovich, New York, 1974, p.73.
- 2) Velimir Terzić, *Slom Kraljevina Jugoslavije 1941 vol.1.2, Partizanska knjiga, Beograd-Ljubljana / Narodna knjiga, Beograd / Pobjeda, Titograd, 1982.*
- 3) Ljubo Boban, *Kontroverze iz povijesti Jugoslavije 1, Školska knjiga/Stvarnost, Zagreb, 1989.*
- 4) 近年のクロアチア人歴史家の研究として次のものがある。Goran Hutinec, *Historiografija o uzrocima poraza Kraljevine Jugoslavije u Travanjskom ratu 1941-nastavak rata drugim sredstvima, Polemos 7, vol.1-2, 2004.* フティネッツは戦前にクロアチア人およびその他の非セルビア人の民族問題が未解決であったことはユーゴスラヴィア王国の弱さに影響したことは確かであるが、それはこの国の敗戦の唯一の要因でもないし、主要な要因でもないと主張する。彼によれば1941年4月のユーゴスラヴィア王国の軍事的敗北の真因はこの国の長期的な外交政策と防衛政策

- に誤りがあったこと、およびこの国の軍隊と一般人民の日常的な関係が悪く、軍用の物資や家畜の提供などの面で戦時に人民から協力が得られなかったことにあるとされる。しかし、この論文でフティネッツは新しい事実を指摘しているわけではない。彼の論文の意図は、ユーゴスラヴィア王国軍の早すぎる崩壊について、クロアチア人による祖国の裏切りが主要な要因だという見解が今日でも流布している事態を憂慮し、クロアチア人歴史家の立場から改めて修正的解釈を提示することであったと私はみている。
- 5) バルカン半島の国々の中立はイタリアにとっても歓迎すべき事態であった。参戦の準備ができていなかったイタリアが当面、中立にとどまることができたからである。他方、この地域での中立は英仏にとっても好都合だった。それによって、イギリスが特別の利害関心をもつ中東にドイツが接近するのを防止できたからである。もともとドイツの侵攻計画に対する防壁としてバルカン半島に中立国のブロック

を形成する構想をイギリスはもっていた。ユーゴスラヴィア政府はこの構想に関心をもっていたが、この構想は各国の調整が付かず、実現しなかった。その理由は、バルカン協商を結んでいた国（ユーゴスラヴィア、ギリシア、ルーマニア、トルコ）とハンガリー、ブルガリアとの間に調停しがたい対立があったからであった。ユーゴスラヴィア政府もこのブロックの形成によって大国間の紛争に巻き込まれたいと考へ、最後にはこの構想に消極的になった(Bogdan Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, Školska Knjiga, Zagreb, 1975, p.109.)。

6) Ibid., pp.114 -115.

7) Ibid., pp.122-123. このとき、ヒトラーは、バルカン半島の新秩序に関して、ギリシアのサロニカをユーゴスラヴィアが獲得し、エーゲ海への出口を確保するようにはからうことをほのめかしていた。

8) Ibid., p.125.

9) Ante Smith-Pavelić, „Jugoslavija i Trojni Pakt, Posebni Otisak iz “Hrvatke Revije”, God. IV. Sv.1-2, Buenos Aires, 1959, pp.97-99, Čulinović, Jugoslavia između dva rata 2, Školska Knjiga, Zagreb, 1962, pp.184-185. チュリノヴィッチによると、王国顧問会議に閣僚の全員が招集されていたわけではなかった。とくに親枢軸国の外交路線に反対すると考えられる者は呼ばれなかった。

10) Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, p.126.

11) Ibid., pp.126-127.

12) ベルシッチ少尉は、ユーゴスラヴィアはきわめて短時間にもっとも重大な決定を下さなければならない状況に置かれていると述べ、以下の7項目について、ギリシア・イギリス軍から軍事的な支援を得られるかどうかを質問した。1. ユーゴスラヴィア軍の一部がギリシア国境を越え、エーゲ海方面へ撤退しなければならない状況になった場合、この撤退が成功するように側面から支援してもらえるか。2. その場合、この撤退部隊は少なくともオルファノス湾からドイランスキー湖までの地点を連合軍に守ってもらわなければならない。3. この部隊に対する保全是、南方に撤退を強いられた部隊が再統合され、再び作戦行動が可能になるまで続けられなけれ

ばならない。4. この部隊に対してはあらゆる種類の物資が供給されなければならない。5. ユーゴスラヴィア軍の別の部隊はあらゆる地点で抵抗を続けながら、西方に向けて長い距離を撤退し、アドリア海に向かう。この部隊に対してもこの撤退の期間中に必要な軍事物資が供給されなければならない。6. これらの部隊の撤退は、もし彼らが戦闘の中で海岸部に追い詰められた場合、艦船への乗船によって確保されなければならない。7. 第1項と第2項の要求を満たす連合国の支援戦線はおおよそいつぐらいに結成できると期待できるか。ベルシッチ少尉は、ユーゴスラヴィアの上層部の決定に大きな影響を与えることになることを強調して、最後の項目についてとくに明確に回答してほしいと要請した(Feredo Čulinović, Slom stare Jugoslavije, Školska Knjiga, Zagreb, 1958, pp.123-125, Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, p.127)。

13) Čulinović, Slom stare Jugoslavije, pp.125-127, Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, pp.127-128, Čulinović, Jugoslavia između dva rata 2, pp.186-188.

14) これと関連し興味深いのは、3月17日に政府は軟禁していた前首相のミラン・ストヤディノヴィッチをギリシアに追放し、イギリスの監視下に委ねたことである。枢軸国の信頼が厚かったストヤディノヴィッチのイギリスへの引き渡しは様々な憶測を呼んだ。その一つはドイツと交戦していたイギリスに彼を引き渡したことによって、パヴレ公はユーゴスラヴィアがいかに不本意に三国同盟に加入しようとしているのかを示そうとしたとも考えられた(Dušan Biber, O padu Stojadinovićeve vlade, Istorija XX veka, Zbornik radova VIII, Beograd, 1966, p.58)。

15) Ante Smith-Pavelić, Jugoslavija i Trojni Pakt, pp.100-101, Feredo Čulinović, Dvadeset Sedmi Mart, Izdavački zavod Jugoslavenske akademije, Zagreb, 1965, pp.157-159. その際、外相のツインツァル-マルコヴィッチはドイツ政府に対し、ユーゴスラヴィアの主権と領土の保全を付属文書の第一項に記すこと、枢軸国の物資と部隊の国内通過を求めないことについては共同声明の形でユーゴスラヴィアの新聞に公表すること、枢軸国との軍事協力およびサロニカの問題については個別の覚え書きを作成する

- ことを求めた。
- 16) Ante Smith-Pavelić, Jugoslavija i Trojni Pakt, p.91.
- 17) Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, p.128.
- 18) 反対したのは、内閣府長官のミハイロ・コンスタンティノヴィッチ、社会政策相のスルジャン・ブディサヴレヴィッチ、農業相のブランコ・チュブリロヴィッチであった。ブディサヴレヴィッチとチュブリロヴィッチは閣議のあと、閣僚を辞任した。ただコンスタンティノヴィッチは反対を撤回し、閣僚の地位にとどまった。ツヴェトコヴィッチはすぐに新しい閣僚を補充し、政権を維持した。
- 19) Ante Smith-Pavelić, Jugoslavija i Trojni Pakt, pp.101-102, Čulinović, Dvadeset Sedmi Mart, pp.172-177.
- 20) Ante Smith-Pavelić, Jugoslavija i Trojni Pakt, pp.105-108, Čulinović, Dvadeset Sedmi Mart, pp.205-211, Čulinović, Jugoslavia između dva rata 2, pp.191-192, Jakob B. Hoptner, Jugoslavija u krizi 1934-1941, Otokar Keršovani, Rijeka, 1972, pp.238-239, Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 2, Liber, Zagreb, 1974, p.374.
- 21) チュブリロヴィッチが引用するシモヴィッチの回想録によると、最初の謁見で彼はすでに、政府が誤った決定をした場合には、部下の空軍将校が決起して空軍司令部や総司令部、政府庁舎を爆撃し、宮廷でさえ攻撃の対象となる可能性があると言ったという (Čulinović, Dvadeset Sedmi Mart, p.191)。
- 22) Ibid., pp.191-192.
- 23) Ibid., p.192-196. マチュックの述懐によると、このときベシッチ將軍はシモヴィッチの警告をまったく真剣に受け止めなかった。彼は、事前に予告されて実行されるクーデターを聞いたことがないと述べたという (Hoptner, Jugoslavija u krizi 1934-1941, p.238)。
- 24) Vladko Maček, Memoari, Hrvatska seljačka stranka, Zagreb, 1992, pp.149-151. しかし、彼はマチュックに対し重ねて入閣を要請した。このときシモヴィッチは、マチュックが入閣しないと、このクーデターは8月26日協定とクロアチア人に反対するために実行されたような印象を与えることになる述べた (Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.358-359)

- 25) Čulinović, Dvadeset Sedmi Mart, p.304, p.322.
- 26) マチュックの回想録によると、彼がベオグラードに出発する前日の4月3日、ドイツ外相のリベントロップの指示を受けたウォルター・マレトウケ (ナチス党外交部代表) がザグレブを訪れ、マチュックに面会を求めた。マレトウケはマチュックに対し、セルビアからクロアチアが分離独立する時期が来たと述べ、ドイツとの協力を勧めた。しかし、マチュックはこの誘いを断った。彼はクロアチアの分離独立は戦争によってのみ可能であるので、そのような行動を起こすつもりはないこと、むしろ戦争を回避するために全力を尽くしたいと伝えた。マチュックはマレトウケに対し、リベントロップへの伝言を依頼した。それは、国王が成人を宣言し、新政府が成立した以外に何も変化はないので、ドイツの側がユーゴスラヴィアに戦争を仕掛ける理由はないということだった。マチュックは、一部の未熟な若者を除いてユーゴスラヴィアでは誰も戦争を望んでいないと述べた。マレトウケは期待した反応が得られなかったことを残念だとしたが、ユーゴスラヴィアに対する戦争が無益であるというマチュックの考えを伝えることを約束した (Maček, Memoari, p.152)。
- もっとも、ドイツ側の資料によれば、マレトウケはこのときマチュックに対し、ベオグラードに行ってもベルリン政府との協議なしにはいかなる措置をもとらないことを求め、了解を得た。マレトウケはこの日さらにコシュティッチとも会い、マチュックがベルリン政府の承認なしにはいかなる措置をもとらないように働きかけてくれるように依頼した。コシュティッチはこのメッセージを二日後にマチュックに伝えたという。マチュックと会ったあとマレトウケはドイツ領事館から次のような報告をリベントロップ外相らに送った。1. マチュックは、「独立大クロアチア」に関する協議をすべてきっぱりと断った。2. セルビアは再び三国同盟に対する支持を自発的に表明するだろう。3. ユーゴスラヴィアはドイツ帝国を満足させる態度を示さなければならないことをマチュックは自覚している。4. マチュックは、もしベルリン政府が同意するならば、三国同盟に対する支持を再び表明し、ドイツ側を満足させる回答を与えるために、ドイツ側と交渉したいと政府に提案する用意がある。5. 実際には重要性をもたない国王に対して、二人の後見人を付けて排他的な権力をも

たせる。6. スロヴェニアを分離独立させる考えは論外である。その分割も同様である (Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.369, Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 2, pp.400-402)。

- 27) マチュックの回想録によれば、このとき彼はクロアチアの自治権拡大、とくにクロアチア州に駐留する憲兵の指揮権を軍隊の司令部からクロアチア州政府へ移管することをシモヴィッチに打診するようにコシュティッチに指示した。これに対してシモヴィッチは肯定的な回答をしたとコシュティッチは報告した (Maček, Memoari, p.151)。
- 28) Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, p.129.
- 29) Ibid., p.130.
- 30) ユーゴスラヴィアに対する攻撃を決定した3月27日のドイツ指導部の会議の内容は、戦後のニュルンベルグ軍事法廷における旧ドイツ陸軍高官の証言によって明らかになった。それによれば、たしかにヒトラーはこの日にユーゴスラヴィアの攻撃を指示したが、ユーゴスラヴィアを征服する計画自体はそれ以前から持ち合わせていたとされる。イタリア外相のチアーノの日誌によれば、彼はいずれユーゴスラヴィアをドイツとイタリアで分割することを、ムッソリーニと申し合わせていた。したがって、クーデターの発生はこの計画を実行するきっかけを与える結果になった。なお3月27日の会議の中でのヒトラーの発言で注目されるのは、ユーゴスラヴィアに対する作戦に際しては、クロアチア人に政治的な譲歩(自治)を約束して枢軸国の味方にするように指示していることであった (Čulinović, Slom stare Jugoslavije, pp.145-148, Čulinović, Jugoslavija između dva rata 2, pp.203-205)。
- 31) 4月4日、副首相への就任のためベオグラードに到着したマチュックは直ちに首相のシモヴィッチに対し戦争を回避できるかと尋ねた。シモヴィッチはその可能性はあると答えた。その際、彼が根拠にしたことは、アルバニアの部隊をユーゴスラヴィアに派遣するのを嫌がっているイタリアがドイツとユーゴスラヴィアの関係の仲介を申し出ているとのことであった。翌日マチュックは、ドイツが攻撃の準備を整えるまでにどれくらいの時間がかかるかと尋ねた。シモヴィッチは、もし万全の準備で攻撃をしようとするれば、ハンガリーに駐留している部隊を移動

させなければならないので、あと14日はかかるだろうと答えた。もっとも、あえて危険を冒すつもりならば、ブルガリアに駐留させている部隊を動かしてすぐに攻撃を仕掛けてくることがあるとシモヴィッチは付け加えた (Maček, Memoari, p.153)。

- 32) Krizman, Vanjska Politika Jugoslavenske Države 1918-1941, p.133.
- 33) Ibid, p.134.
- 34) Ibid, p.134. なおニンチッチはベルリン駐在のユーゴスラヴィア大使のアンドリッチに対し、ドイツ外務省を訪問して国益に一致する限りあらゆる譲歩をおこなうように指示した。しかし、ドイツ政府はアンドリッチの訪問を受け入れなかった。ドイツ外相のリベントロップはイタリア外相チアーノとの電話会談の中で、ユーゴスラヴィア側の声明に対してはいっさい反応をしないつもりだと述べていた。彼は、ユーゴスラヴィア首相がイタリア大使に述べた見解と照合すればこの声明の価値がどの程度のものかわかると述べて、ユーゴスラヴィア側に対する不信感を露わにした。このときドイツ政府は、11人のドイツ人が殺害されたという報告を受けているとリベントロップは述べていた (ibid., pp.134-135)。
- 35) Ibid., p.135.
- 36) Hoptner, Jugoslavija u krizi 1934-1941, pp.273-274.
- 37) ソ連政府が友好・不可侵協定への変更を提案したのは4月4日であった。しかし、この協定の第二条は「協定の締結国の一方が第三国から攻撃を受けた場合、もう一方の国はこの攻撃国に対して協力をしない」と述べる一方で、ソ連側はユーゴスラヴィアに対して軍事物資の供与を約束していたので、ユーゴスラヴィアの全権代表のガヴリロヴィッチ (農業者党幹部でこのときモスクワ大使を務めていた) はこの協定を受け入れるつもりでいた。しかし、ソ連側はこの直後に修正案を提示し、第二条を「協定の締結国の一方が第三国から攻撃を受けた場合、もう一方の国は政治的な中立と友好関係を維持する」に変更した。これは、ユーゴスラヴィアに対する外交的・軍事的な支援が期待できないことを意味していた。突然の変更には驚いたガヴリロヴィッチは協定の受け入れを拒否した。ソ連側はユーゴスラヴィア側にベオグラード政府との協議を促し、最後には協定の成立を急ぐシモヴィッチ首相の指示により、ガヴ

リロヴィッチは協定に署名した (Hoptner, Jugoslavi-
ja u krizi 1934-1941, pp.267-270)

他方シモヴィッチはベオグラードのイギリス大使館を
通して連合側への支援を打診していた。イギリス大
使のキャンベルはイギリス外相のエデンの訪問を主
張したが、これはドイツの攻撃の口実になると述べ
て、シモヴィッチは断った。その代わりに3月31日に
エデンの秘書のデイクソンおよび陸軍幹部のディール
将軍がベオグラードを訪れ、4月1日にシモヴィッ
チを含めてユーゴスラヴィア軍総司令部代表と会談
した。シモヴィッチによれば、その際イギリス側は
将来の同盟を確約しつつ、ユーゴスラヴィア側にブ
ルガリアのドイツ軍とアルバニアのイタリア軍を直
ちに攻撃し、窮地にあるギリシアを救援することを
要請した。しかし、ユーゴスラヴィアの軍部は、枢
軸国の攻撃があった場合、ギリシアのサロニカ方面
とアドリア海方面に部隊を撤退させる計画をもって
おり、これをイギリスの艦船で移送してもらいたい
と考えていた。ところが、ユーゴスラヴィア側の支
援要請に関しては、ディール将軍は、イギリスの艦
船はサロニカ湾にもアドリア海にも向かうことはで
きないと述べて、支援を拒否した。シモヴィッチは、
イギリスの支援はあてにならないと考えざるを得な
かった (Čulinović, Jugoslavia između dva rata 2,
p.215)。

38) ドイツ側の資料と専門家の協力を基にアメリカ軍
がまとめた報告書 (United States Department of
the Army, The German Campaign in Balkans,
spring 1941, 1953) によると、この攻撃にはオースト
リアとルーマニアのドイツ空軍基地から150機の爆撃
機が護衛の戦闘機とともに参加した。ユーゴスラ
ヴィアの空軍機は応戦したが、20機は撃墜され、44機
は地上で破壊された。ドイツ軍は2機の戦闘機を失っ
ただけであった (George E. Blau, Invasion Balkans!
: The German Campaign in the Balkans, spring
1941, Burd Street Press, 1997, p.48)。この報告書で
は1時間半に及ぶ空爆の結果17000人のベオグラード
市民が犠牲になったと記されているが、1941年4月戦
争に関するウィキペディアの記事を見ると、犠牲者
の数はクロアチア版では2000-4000人、セルビア版で
は1万人と見積もられている。

39) 4月11日には新しく成立した独立クロアチア国の
政府はドイツ軍との戦闘を停止し、ユーゴスラヴィ

ア軍を直ちに離脱するように国民に呼びかけた。

40) 4月6日から4月13日までに政府は7回閣議を開
いた。サヴァ・コサノヴィッチ (食糧問題担当相)
が保管していた議事録は、チュリノヴィッチの著作
(Slom stare Jugoslavije) に掲載されている。

41) 4月8日の閣議で財務相のシューテイは次の提案
をおこない、了承された。1. 危険にさらされてい
る政府職員には二ヶ月分の給料を前払いする。2.
内閣と共に避難している職員には80ディナールから
100ディナールの日給を食糧費として支払う。閣僚付
の運転手と憲兵には1000ディナールの月給を支払う。
3. 各閣僚には閣僚付職員の人件費として国庫から10
万ディナールを引き出すことを認める。しかし、4
月9日の閣議では不必要な政府職員は職務からは
ずすことにし、二ヶ月間の給料と共に二ヶ月間の休暇を
与えるとした (Čulinović, Slom stare Jugoslavije,
pp.194-195)。

42) マチュックは副首相を辞し、その代わりにクロア
チア農民党総書記のクルニェヴィッチがパレに向か
い、無任所相として入閣した。

43) コサノヴィッチが保管していた議事録にはシモヴ
ィッチの発言内容が記録されていなかった。しかし、
ユーゴスラヴィア王国軍の降伏の決定についての政
府としての責任を回避するため、1942年1月20日にロ
ンドンに亡命していた王国政府はこの日の議事録を
補完する決定をおこなった。それによるとシモヴィ
ッチはこの閣議で大略次のように発言した。1. ユ
ーゴスラヴィア軍は敵方の進軍を食い止めることが
できていないが、サヴァ川とドリナ川の戦線 (=ボ
スニア・ヘルツェゴヴィナの防衛線) を立て直す可
能性はまだある。2. バニャ・ルーカ (=ボスニア
の要衝) は確かに陥落したが、この方面の敵方の侵
攻は食い止められるだろうと思っている。3. 戦況
はまだ危機的ではないが、政府は大事をとってでき
るだけすみやかにニクシッチに移動する必要がある。
4. ユーゴスラヴィア軍総司令部は本日パレに到着
するが、自分 (シモヴィッチ) は参謀総長の職をカ
ラファトヴィッチ将軍に譲る。首相と総司令部の指
揮官を兼任していることに批判があるためである。
5. サヴァ川とドリナ川の戦線で抵抗を続けること
はもはや不可能ではないかという閣僚の一人 (バニ
ャニン無任所相) の発言に対して、シモヴィッチは、
総司令部はそのような可能性も想定しており、その

場合にはネレトヴァ峡谷をめざして西方に退却すると答えた (Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, pp.332-333)。また閣議に参加していたスロヴェニア人閣僚のクレクに対するアメリカの研究者ホプトナーの聞き取りによると、このときシモヴィッチは少なくとも数ヶ月はモンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、およびセルビアの一部を維持できると強調したという (Hoptner, *Jugoslavija u krizi 1934-1941*, p.277)。

- 44) Hoptner, *Jugoslavija u krizi 1934-1941*, p.277, Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, pp.281-282.
- 45) Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, pp.282-283. ところで政府がニクシッチに到着したとき、国防相のイリッチ将軍は、シモヴィッチの指示によりパレのカラファトヴィッチが降伏の交渉を始めたことを報告した。シモヴィッチはイリッチの報告を了承したが、カラファトヴィッチは戦場の行為として降伏しようとしているのであり、政治的な行為としてではないと強弁したという (Hoptner, *Jugoslavija u krizi 1934-1941*, p.277)。
- 46) チュリノヴィッチによると、1941年4月14日の早朝にカラファトヴィッチ将軍がシモヴィッチ首相を訪ねていたことは部下のボーディ将軍が戦後に証言し、またシモヴィッチ自身も1946年に提出した戦時報告書の中でこのことを認めている。ただカラファトヴィッチの訪問が参謀総長の辞令交付の前であったか後であったかは明らかではない (Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, p.285)。
- 47) このときユーゴスラヴィア軍総司令部はこの決定を正当化するため、参謀総長のカラファトヴィッチ以下四名の最高幹部が署名した次のような公式文書を作成した。「あらゆる戦線での我が軍の敗退、クロアチア、ダルマチアおよびスロヴェニアにおける我が軍の完全な崩壊、さらに政治的状況と軍事的状況をあらゆる方面から検討した結果、我々は、これ以上の軍事的な抵抗は不可能であり、それは成功の見込みが少しもないのに不必要な血を流すことになるだろうという結論に達した。他方、この戦争は我が国民も我が軍も望むところではないので、(政府からの指示書の) 第三項の最後の文言を考慮せず、第四項の命令権限の委譲に基づいて我々は次のように決定した。1. 直ちに、すなわち我が国の全領土が占領されないうちにドイツ軍およびイタリア軍部隊に

対し敵対行為の停止を求める。2. 我が国の兵士と国民に対しこの不本意な戦争がもたらすあらゆる負担を軽減することを目的として、ドイツ軍およびイタリア軍との名誉ある休戦を実現するためにあらゆる必要な措置をとる。3. この目的を達成するため、所定の命令文書を作成し、必要な措置を講じる」(ibid., p.284)。

- 48) Ibid., p.291.
- 49) Ibid., pp.293-294, pp.297-298.
- 50) カラファトヴィッチ将軍が困ったことは、ドイツとの協定に署名する有力な政治家が国内にいないことであった。シモヴィッチ政権の閣僚はパレを去り、すでに国王と共に国外に脱出していた。そこで総司令部は前外相のツインツァル・マルコヴィッチの存在を思い出した。彼は外相の前には駐ドイツ大使を務め、枢軸国には大変よく知られた外交官であった。ツインツァル・マルコヴィッチは3月27日のクーデターのあとシモヴィッチ政権の命令によりセルビアのブルスという村に連行され、移動を禁じられていた。カラファトヴィッチは部下を派遣して彼を探し、サラエヴォの総司令部に同行させた。当初彼はユーゴスラヴィアが戦争をしていたことを知らなかったという (ibid., pp.299-300)。
- 51) ドイツ側の報告によると、この戦争におけるドイツの死傷者は非常に軽かった。12日間の戦闘での戦死者は151名、負傷者は392名、行方不明者は15名であった (Blau, *Invasion Balkans!*, p.62)。
- 52) ドイツ軍は投降したユーゴスラヴィア軍の将兵を選別し、クロアチア人、ドイツ人、ハンガリー人、ブルガリア人を解放した。この結果、捕虜として收容された者は254000人であった (ibid., p.62)。そのほとんどはセルビア人であり、彼らの多くはドイツで強制労働をさせられた。ドイツ軍はセルビア人の将兵が反乱を起こすことを恐れて彼らを連行した。ドイツ軍の記録によると、1941年6月の時点でドイツの施設に收容されていたユーゴスラヴィア人の戦争捕虜は181258名に上り、このうち13559人は将校であった。他方、ドイツ軍が解放した捕虜のうち、新しく建国された「独立クロアチア国」の諸地域の出身の将校はこの国の軍隊に加わるように促された (Jozo Tomasevich, *Yugoslavia During the Second World War*, in Wayne S. Vucinich (ed.), *Contemporary Yugoslavia*, University of California Press, 1969,

p.73,p.366)。

- 53) もっとも、ドイツは当初、マチュックにクロアチアの独立を宣言させたいと考えていた。これには二つの狙いがあった。一つはこれによってイタリアのエージェントであるウスタシ指導者のパヴェリッチの政権獲得を不可能にし、イタリアの影響力を弱めることであった。もう一つは、少数派政治集団のウスタシに比べてはるかに大きな政治的影響力をもつクロアチア農民党に政権を担わせることによって、新政権により大きな安定性を確保することであった。しかし、マチュックにはそのような役割を引き受ける考えがなかったため、この計画は実現しなかった。ヒトラーはさらにこの国家をハンガリーの後見の下に置き、イタリアの影響力を弱めると共にハンガリーの好感を得ようと考えたが、これも成功しなかった。それゆえ、ドイツは最後の選択肢としてウスタシの協力を得ることとし、4月10日のザグレブ進駐と同時にその指導者の一人であるクヴァルテルニクにクロアチアの独立宣言をさせた。
- 54) その上、修理の際、武器の部品の一部を輸入に頼っていた。とくに最新の武器である自動小銃はチェコスロヴァキア製であり、国内でも修理できたが、一部の部品はどうしても同国から輸入しなければならなかった。(Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, pp.163-164.)。しかし、チェコスロヴァキアはドイツによって解体されたため、部品の供給は途絶えていた(Blau, *Invasion Balkans!*, p.31)。
- 55) Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, p.166.
- 56) Blau, *Invasion Balkans!*, p.37.
- 57) Tomasevich, *Yugoslavia During the Second World War*, p.71.
- 58) Terzić, *Slom Kraljevina Jugoslavije 1941 vol.2*, p.220, p.225.
- 59) Tomasevich, *Yugoslavia During the Second World War*, p.70.
- 60) まず1939年初めにS計画が策定された。これはドイツがオーストリアを併合し、ユーゴスラヴィアと直接に国境を接したことを契機に策定された計画であり、ドイツとイタリアの攻撃を想定し、北部国境の防衛に重点を置いていた。次に1940年春にR-40計画が策定された。これはイタリア軍ならびに旧オーストリア国境とハンガリーから侵攻するドイツ軍を想定した防衛計画であった。ところが、周辺諸国の

三国同盟加入によってこの計画は不適切になり、1941年2月半ばにR-41計画が策定された。これは枢軸国は、ギリシア国境を除いて、あらゆる国境から攻撃してくることを想定していた。しかし、国防のマスタープランは立案されたが、兵員の配置や日程など施行計画が完成しないうちにユーゴスラヴィアは開戦の日を迎えてしまった(Čulinović, *Slom stare Jugoslavije*, pp.171-175)。

- 61) Blau, *Invasion Balkans!*, p.51. 同書によると、クロアチア人将校の中には戦争が始まらない時点でドイツ軍に投降した者がいた。すなわち、開戦の直前の4月3日にユーゴスラヴィア空軍に所属するクロアチア人の一将校がドイツ空軍の基地があるグラーツに飛来し、亡命した。その際、彼はドイツ軍にユーゴスラヴィア空軍の飛行機が配備されている空港のリストを手渡した。4月6日にドイツ軍はこのリストに基づいて空爆をおこない、ユーゴスラヴィア軍の貴重な航空戦力に致命的な打撃を与えることができたという。またクロアチア人将校の中にはドイツ軍と交戦していたセルビア人部隊に組織的な攻撃を指示する者もいた。たとえば、4月8日にはザグレブとベオグラードを結ぶ交通の要衝であるヴィンコフツィでクロアチア人部隊が反乱を起こし、ユーゴスラヴィア軍の第一軍司令部を襲撃し、指揮官の身柄を拘束するという事件が起こった(*ibid.*, p.66)。
- 62) アメリカ軍の報告書によると、4月8日、この地域を守るユーゴスラヴィア軍の第五軍の指揮官は最初反撃を試みたが、強力な大砲と航空部隊の支援を受けて進撃するドイツ軍の力強さに圧倒され、戦術的に退却を命じた。4月9日、ドイツ軍はニーシュを陥落させた。この地域からベオグラードまではモラヴァ川沿いに進めばよいのでドイツ軍の進軍は容易になったとされる(*ibid.*, p.49)。
- なお4月13日にベオグラードが陥落してからセルビア中部を守るユーゴスラヴィア軍は著しく戦意を喪失し、ドイツ軍は4月14日と15日の作戦行動で数万人の将兵を捕虜にした。たとえば、その数はニーシュで7000人、ウジツェ付近で40000人、ズノルヴク付近で30000人、ドボイその他で6000人と報告されている(*ibid.*, p.61)。